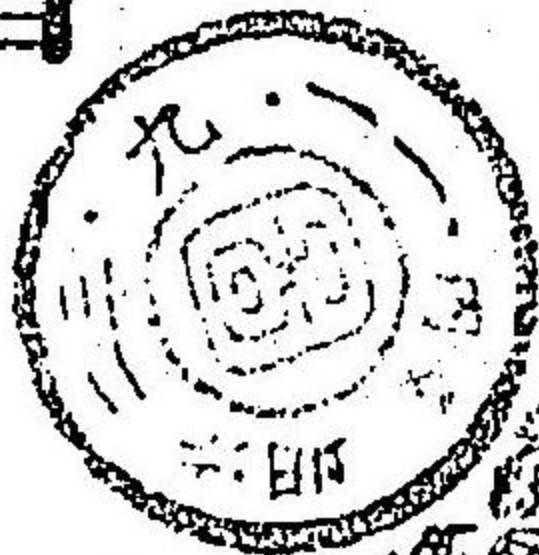


大審院檢事從五位三島 毅君序
東京控訴院評定從六位今村信行君閱
法律取調報院告從七位大戸復三郎著
始審裁刑所制事



法律要解

上卷

東京書肆

九春堂發

分

訴訟法要解序



大平君曾學吾二松巖
數年去入司法省法學
校業成任判事實行所
學殆十年頃推乃其所著

新頒訴訟法要解來請
叙余因指堂前二松樹
曰彼亭亭卓立達天賦
之節猶人民遂自主之
權也然其初動爲惡樹

亂竹所妨害依場沙洗
除之力始能如此亦猶
良吏除姦民妨害而民
始此遂是朝廷所以
有訴訟法之頒布也然

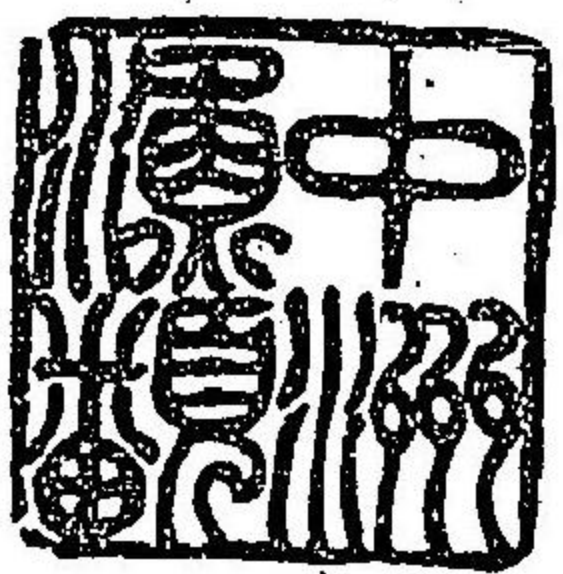
法文詞簡而意奧是子
所以有要解之甚也其
有益於吏民豈鮮少哉
抑此著說法精密固得
之法學哉而其文簡明

易解則均非得之二松
棠乎乃二松之贊亦
將增生色也請以此代
序言君曰善乃書

明治庚寅七月

大審院檢事

從五位三島毅撰



緒言

夫レ訴訟法ハ他人ヲシテ己ノ權利ヲ知ラシメ又他人己ノ權利ヲ犯ストキ之ニ對シテ權利ノ成立スルヲ知ラシメ若クハ之ヲ尊敬セシメンカ爲メ裁判所ニ訴フルノ方法ヲ示定セルモノナリ而シテ民法ノ主眼トスル所ヲ繹ヌルニ民法ハ人ト人トノ關係及ヒ人カ物ニ對シテ有スル所ノ權利ノ性質竝ニ其權利ノ廣狹ヲ定ムルモノナリ然レモ若シ他人ヲシテ其權利ヲ知ラシムルコト能ハス又之ヲ犯ストキ裁判所ニ訴フルノ方法ヲ定ムルコトナキトキハ民法

ハ之レ死物ノミ之レ徒法ノミ毫モ其効力アルヲ見サルナリ故ニ訴訟法ト民法トハ恰モ唇齒ノ關係アルモノニシテ造次モ相離ルヘカラサルモノナリ又訴訟法ノ内部ニ入り之ヲ觀察スルニ訴訟法ハ人ヲシテ裁判所アルヲ知ラシメ訴訟ヲ爲シ答辯ヲ爲シ證據ヲ出シ辯論ヲ爲シ裁判言渡ヲ爲サシメ之ヲ覆審セシメ又裁判執行ヲ爲サシメン爲メ履踐スヘキ規則ヲ蒐集セルモノニシテ實ニ權利伸達ノ方法至レリ盡セリト謂フ可キ矣

而シテ民事訴訟法ト刑事訴訟法トハ均シク之レ訴

訟手續ヲ定ムルト雖トモ其間大ニ相異ナルモノアリ民事訴訟法ニ於テハ訴訟本人ヨリ事ヲ始ムルモノニシテ裁判所ノ裁判ヲ爲スニモ本人ノ申立ヲ以テ之カ基礎トナスト雖モ刑事訴訟法ニ至テハ通常政府自身ニ訴人ト爲ルヲ以テ裁判官ハ眞實ヲ之レ穿鑿シ以テ只管公然ノ利益ニ配心スルモノナリ

右述フル如ク訴訟法ハ權利ノ基礎ヲ確定スルニ在ラスシテ之カ活用方法ヲ定ムルモノナリ故ニ訴訟法ヲ創定スルニ方テハ寧ロ理論ヲ後ニシ便益ヲ先ニセサル可カラサルナリ而シテ便益トハ眞實ヲ發

見シ眞實ヲ證定シ實事ニ法律ヲ適用シ又訴訟手續
 ナ急速ニシ訴訟費用ヲ儉省スルヲ之レ務ムルヲ謂
 フ
 謹テ創定訴訟法ヲ案スルニ或訴訟ニ檢事ヲシテ立
 會ハシムル如キ又本人訊問法ノ如キ儘々佛法ニ倣
 フ所ナキニアラスト雖トモ其大概ニ至テハ模範ヲ
 獨法ニ採レリ夫レ如此獨法ニ模倣セル所以ノモノ
 大ニ故アルナリ獨法ハ理論ニ拘泥セス偏ニ便益ニ
 基キ能ク訴訟法ノ本体ニ適合スレハナリ或ハ曰ク
 創定民法ハ專ラ佛法ヲ採用セリ然ルニ之ヲ運用ス

ル訴訟法ニ至リ獨法ニ模倣スルハ如何ト之レ民法
 ト訴訟法トハ其基クトコロノ大則互ニ相異ナル所
 アルヲ知ラサルノ言ノミ抑訴訟ハ便益主義ニ基ク
 モノトスルトキハ何國ノ法則ニテモ苟モ能ク此主
 義ニ適合スルモノアレハ直ニ採テ以テ之ヲ用ユル
 可ナリ安ソ佛ト獨トヲ問フヲ要センヤ
 又創定訴訟法ハ其手續ノ能ク整理スルハ論ナク一
 般訴訟ノ便益ヲ計リ且訴訟人ニ自由權利ヲ與フル
 尠少ナラサルナリ試ニ之ヲ舊法ニ比較スルニ裁判
 管轄ノ合意、裁判職員ノ除斥及ヒ忌避、檢事ノ立會、訴

訟上ノ救助、口頭審理、原狀回復、證據保全、督促手續、抗告、證書訴訟及ヒ爲替訴訟、仲裁手續ノ如キ孰レモ新制ニ係ルモノニシテ此等ノ制一トシテ訴訟ノ便益訴訟人ノ自由ヲ計ラサルハナシ若シ今後法ヲ執ル者訴訟ヲ爲ス者能ク此法ヲ運用セハ蓋シ其便益自由ヲ感スル尠カラサルヘシ

民事訴訟法要解

例言

一本書ハ今茲明治二十三年三月二十七日法律第二十九號ヲ以テ公布ノ民事訴訟法ヲ解釋スルモノナリ

一本書正條ノ下字解、解義、分析、理由等ノ目ヲ設テ其意義ヲ解釋シ以テ各事由ヲ講究スルニ便ナラシム即チ其概畧ヲ舉グレハ左ノ如シ

字解 條中緊要ナル語ノ意義ヲ釋明ス

解義 其條全體ノ意義ヲ解釋ス

分析 其條ノ意義ヲ分析釋明ス

理由 其條ヲ設ケシ理由ヲ說明ス

例 其條ノ意義ニ適切ナル譬諭ヲ指示ス

比較 其條ノ法則ヲ爾餘ノ法則ト對比シ以テ其差異ヲ說示ス

辯疑 其條ノ文旨ヨリ生スル疑義ヲ辯明ス

參照 其條ニ該當スル獨逸訴訟法ヲ比照ス即チ獨第何條ト

アルハ獨逸法ノ略語ナリ

以上分項釋明スルト雖モ律意明瞭ニシテ一々明示ヲ要セサル

モノハ之ヲ省略シ或ハ相關聯シテ分ツ可ラサルモノハ一項中

ニ之ヲ併記ス

一本書ハ務メテ了解シ易キヲ旨トシ平易約說ス行文右側ニ圈點ヲ施スモノハ讀者ノ特ニ注目ス可キ要點ヲ指示スルモノナリ

明治二十三年八月

著者誌

民事訴訟法要解上卷目錄

緒言

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄

第三節 管轄裁判所ノ指定

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ

合意

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ

忌避

第六節 檢事ノ立會

(自第一條
至第九十八條)

(自第九十九條
至第四十二條)

(自第九十九條
至第一百零一條)

(自第一百零二條
至第一百零五條)

(自第一百零六條
至第一百零八條)

(自第一百零九條
至第一百一十一條)

(自第三十二條
至第四十一條)

第四十二條

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第二節 共同訴訟人

第三節 第三者ノ訴訟參加

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第五節 訴訟費用

第六節 保證

第七節 訴訟上ノ救助

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第二節 送達

第三節 期日及ヒ期間

(自第四十三條
至第四百二條)

(自第四十三條
至第四十七條)

(自第四十八條
至第五十八條)

(自第五十一條
至第六十二條)

(自第六十三條
至第七十三條)

(自第七十二條
至第八十二條)

(自第八十七條
至第九十七條)

(自第九十一條
至第一百二條)

(自第一百三條
至第一百八十九條)

(自第一百三十五條
至第一百三十五條)

(自第一百三十六條
至第一百五十八條)

(自第一百五十九條
至第一百七十二條)

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回

復

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中

止

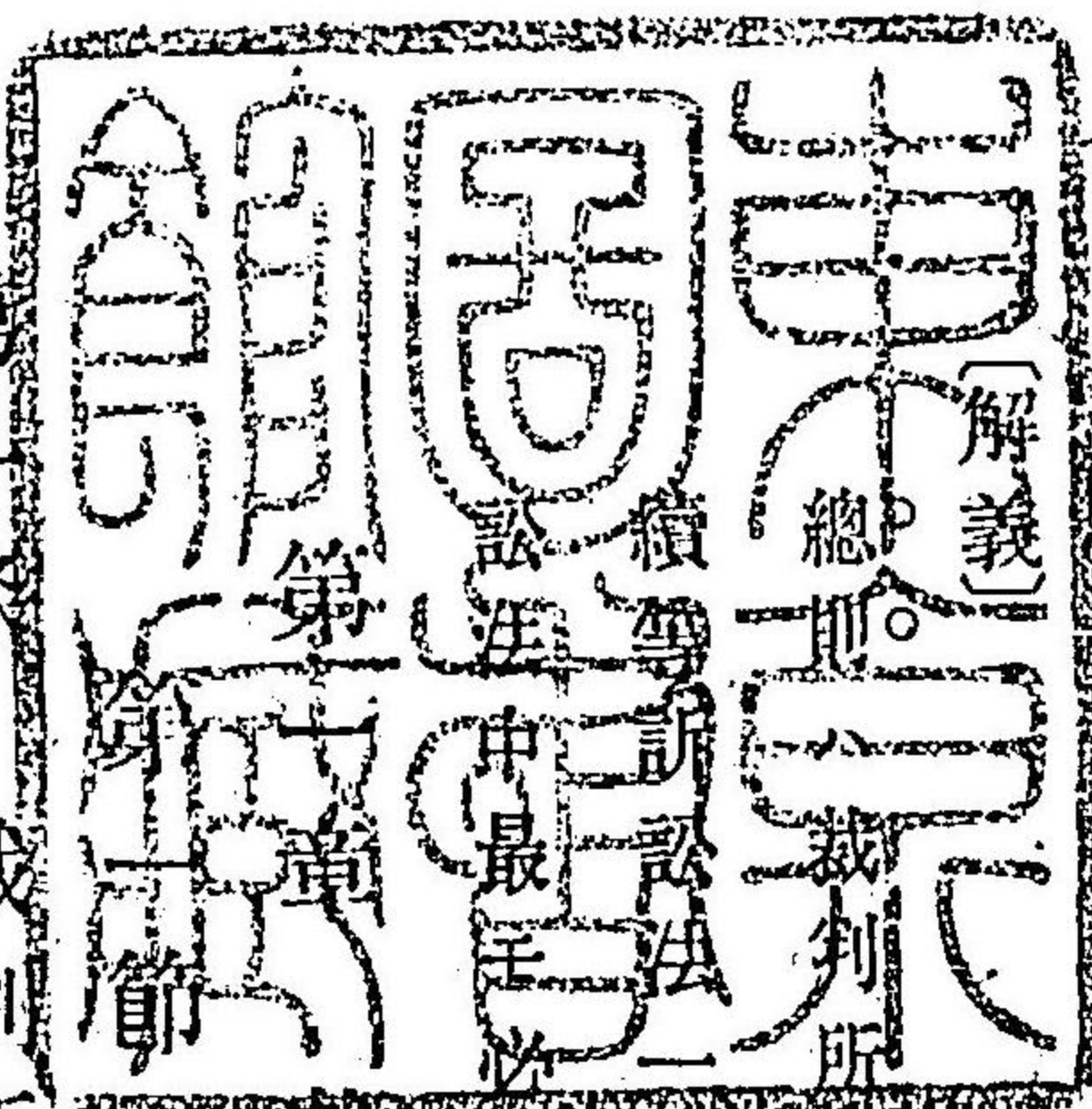
(自第七十三條
至第七十七條)

(自第七十八條
至第八十九條)

民事訴訟法要解

大戸復三郎著

第一編 總則



〔解義〕
總則。裁判所ノ管轄當事者(即チ訴訟人)ノ資格及ヒ訴訟ノ手續等。訴訟法一般ニ適用ス可キ原則ヲ示定セルモノニシテ訴訟法中最モ重要ナル部分トナス

第一章 裁判所

裁判所ノ事物ノ管轄

第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

〔字解〕

事物ノ管轄トハ訴訟事件ノ管轄ト云フノ義ナリ

〔解義〕

本條ハ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ニ推譲ス可キ事ヲ示定セ

②

抑事物ノ管轄ト土地ノ管轄トハ能ク辨別セサル可ラス事物ノ管轄ハ訴訟カ區裁判所ノ管轄ニ屬ス可キカ將タ地方裁判所ノ管轄ニ屬ス可キカヲ定メ土地ノ管轄ハ訴訟カ何處ノ區裁判所又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬ス可キカヲ定ムルモノナリ猶ホ詳ニ言ヘハ裁判管轄ハ或ハ事物ノ性質ニ依リ或ハ事物ト一定ノ裁判所ノ管轄區トノ關係ニ依リ定マルモノニシテ事物ノ性質ニ基因スル所ノ管轄ヲ事物ニ付テノ管轄ト云ヒ事物ト一定ノ裁判所ノ管轄區トノ關係ニ基因スル所ノ管

大區選
依此區區
選

轄ヲ土地ニ付テノ管轄ト云フ而シテ訴訟事件ハ事物ニ付テノ管轄ノ原則ニ基キ區裁判所若クハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルヤヲ知ルコトヲ得又土地ニ付テノ管轄ノ原則ニ依リ如何ナル地ノ區裁判所若クハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルヤヲ知ルコトヲ得ヘキナリ

一ノ訴訟事件ニ付事物上及ヒ土地上管轄スル所ノ裁判所ハ法律上ノ裁判所ナリ故ニ被告ハ事物及ヒ土地ニ付テノ管轄裁判所ニ從屬セサルヲ得ス若シ其意ニ反シ管轄ニアラサル裁判所ニ訴ヘラルハトキハ之ヲ拒ムノ權アリ
裁判所ノ管轄事物及ヒ土地ニ付テノ管轄ハ或ハ法律ニ因リ或ハ上級裁判所ノ命令ニ因リ或ハ原被告ノ合意ニ因リ定マルモノトス法律ノ之ヲ定ムルトキハ法律上ノ管轄ト云ヒ上

級裁判所ノ命令ニ因リ定マルトキハ裁判所ノ指定シタル管轄ト云ヒ原被告ノ合意ニ因リ定マルトキハ原被告合意ノ管轄ト云フ

管轄ニハ或ハ專屬專ラ一裁判所ノ管轄ニ屬シ決テ他ノ裁判所之ヲ管轄スルコトヲ得サルノ意ノモノアリ或ハ專屬ニアラサルモノアリ

事物ノ管轄ニ付テハ裁判所構成法ノ規定ニ從ハサル可ラス
〔參考〕

構成法 第十四條

區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル

第一 百圓ヲ超過セサル金額又ハ價格百圓ヲ超過セサル物

ニ關ル請求

第二 價格ニ拘ラス左ノ訴訟

(イ) 住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用
占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ
賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ
間ニ起リタル訴訟

(ロ) 不動産ノ經界ノミニ關ル訴訟

(ハ) 占有ノミニ關ル訴訟

(ニ) 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關リ起
リタル訴訟

(ホ) 左ニ掲ケタル事項ニ付旅人ト旅店若ハ飲食店ノ主人
トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴

(二) 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

(三) 旅店若ハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷物金錢又ハ有價物

此他區裁判所ハ構成法或ハ訴訟法ニ依リ數多ノ事件ヲ管轄ス即チ証據保全、和解、督促手續、強制執行處分、假差押、假處分等是ナリ

地方裁判所ノ權限ニ關シ構成法ノ定ムル所左ノ如シ
構成法 第二十六條

地方裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス
第一 第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其他ノ請求

第二 第二審トシテ

(イ) 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ) 區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

〔參照〕

獨 第一條 事件上裁判所ノ權限ハ裁判所編成法ニ依テ之ヲ定ムルモノトス

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ
以下數條ノ規定ニ從フ

〔解義〕

本條ハ訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マル事ニ關シ示定セリ

訴訟物ノ價額ニ依リ裁判管轄ヲ異ニスル時ハ以下ノ諸條ニ依準セサル可ラス裁判所構成法第十四條ニ依レハ區裁判所ハ訴訟物ノ價格百圓ヲ超過セサルトキノミ管轄權限ヲ有セリ故ニ出訴ノ際訴訟物ノ價格ヲ定ムルコト最モ必要ナリ而シテ價額ノ算定方法ニ至テハ以下數條ニ規定セリ

本條訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハノ文字尤モ注意セサル可ラス何トナレハ價額百圓ヲ超過スルト否トニ因リ概子區裁判所ト地方裁判所ノ管轄ヲ異ニスルト雖モ構成法第十四條第二ニ定ムル如ク價額ニ拘ラス區裁判所ノ權限ニ屬スルモノアレハナリ

〔參照〕

獨 第二條 裁判所ノ權限裁判所編成法ニ從ヒ訴訟事件ノ

價額ニ依リ定マル場合ニ限リ後條ノ規定ヲ適用スルモノトス

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額

ニ依リ之ヲ算定ス

果實損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス

〔字解〕

果實トハ天然ノ收穫(即チ穀菜等ノ收穫)及ヒ民法上ノ收穫(即チ貸家料貸地料元資ノ利子等)ヲ總稱ス

〔解義〕

本條ハ價額ノ算定及ヒ算定ノ時期ニ付示定セリ

第一項ハ訴訟物ノ價額ヲ估計スルハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ヲ標準トシテ算定ス可キコトヲ定メリ而シテ何レノ時期ヲ以テ起訴ノ日時ト爲ス可キカハ本法第九十條第三百七十八條ニ明定セリ

本條起訴ノ日時ニ於ケル價額トアルヲ以テ若シ商賣物品ナルトキハ當時ノ市價ニ依ラサル可ラス

一度起訴ノ日時ニ於テ價額ヲ定ムルトキハ爾後ニ至リ價額ニ増減ヲ生スルト雖モ裁判管轄ニ影響ヲ及ホサルナリ

(本法第九十五條第二項)

第二項ハ果實損害賠償及ヒ訴訟入費ヲ主タル請求ニ附帶シテ訴フルトキハ主タル訴訟物ノ價額ニ算入セサルコトヲ規定セリ故ニ主タル請求百圓ニシテ之ニ附加セル請求五十圓

ナルトキ五十圓ハ百圓ニ算入セサルヲ以テ猶ホ區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノトス主タル請求百圓ニシテ附加ノ請求百五十圓ナルトキト雖モ亦同一ナリ然ルニ若シ附加ノ百五十圓ノミ請求スルトキハ單行獨立ナルヲ以テ地方裁判所ノ管轄ナリトス夫レ如此奇恠ノ結果ヲ生スルコトアリト雖モ附加ノ請求主タル請求ニ超過スルコト實際殆ト稀ナリ

本條ハ果實損害賠償訴訟費用ノ三個ニ制限セルヲ以テ仮令類似ノモノアリト雖モ之ニ準據スルヲ得サルナリ例へハ過代料ノ如キハ損害賠償ノ一種ナレトモ本項ニ豫定シアラサルヲ以テ右三個中ニ加フ可ラサルナリ

〔理由〕

物件ノ價額常ニ一定セス今日百圓ノ價格ナルモ明日百十圓

或ハ九十圓ニ高低スルモ圖ヲレス故ニ訴訟物ノ價額ヲ定ムルニ一定ノ時限ヲ豫定スルヲ必要ナリ之レ本條第一項ノ設アル所以ナリ又第二項果實ノ類ヲ主タル請求ニ算入セサル所以ノモノハ是等ノ價額ヲ算定スル常ニ困難繁穴ニシテ爲メニ主タル請求ヲ妨グルコトアレハナリ

〔的例〕

果實ノ例 地所取戻ノ訴訟ニ於テ收穫物ヲ併セ請求スルトキハ收穫物ノ價額ハ地所ノ價額ニ算入セス又元金百圓ノ請求ヲ爲シ利息二十圓ヲ附加シテ請求スルモ利息ハ元金ニ算入セサルナリ
損害賠償ノ例 買取ニ關スル訴訟ニシテ其取引違約ヨリ生スル損害ノ請求又家屋取戻ノ訴訟ニシテ原告カ他ノ住所ヲ

得ルカ爲メ要セシ額ノ賠償ヲ請求スルモ主タル買取品又ハ家屋ノ價額ニ算入セサルナリ

訴訟費用ノ例 訴訟進行中ノ訴訟費用ハ起訴ノ時未タ成立セサルヲ以テ既往ノ費用ヲ云フモノナリ證據保全ニ關シ又ハ督促手續ニ關スル費用ノ類是ナリ

〔参照〕

獨 第四條 訴訟提起ノ時限ハ價額算定ニ付テノ標準トナルモノトス收穫、使用、利子、損害及費用ハ附帶要求トシテ申立ルトキ之ヲ算外トス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲ルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス
本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

〔字解〕

反訴トハ其訴ニ對抗シテ一ノ訴ヲ起スヲ云フ例ヘハ買主カ
物品ノ引渡ヲ訴フルニ當リ賣主ヨリ其代價ヲ請求スルカ如
シ

〔解義〕

本條ハ數箇ノ請求額ヲ合算スル事ニ付示定セリ
第一項ハ一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲スヲ及ヒ數箇ノ請求
ヲ爲ストキハ前條第二項ノ場合ヲ除クノ外之ヲ合算スルコ
トヲ定メリ故ニ百圓ノ貸附金數口アルトキ一個ツ、之ヲ訴
フルトキハ區裁判所ノ管轄ニ屬スト雖モ一ノ訴ヲ以テ請求
スルトキハ之ヲ合算スルニ依リ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル
モノトス

單ニ數箇ノ請求ヲ爲ストキハトアルヲ以テ其請求ノ原因互

ニ相異ナリト雖モ之ニ拘ラサルモノトス例ヘハ百圓ノ貸附
金ト價額百圓ニ相當スル物件ノ引渡トヲ求ムルトキ之ヲ合
併スルモ決シテ不可ナルコトナシ然レトモ訴訟ノ性質或ル
裁判所ノ管轄ニ專屬スルモノト專屬セサルモノトアルトキ
ハ之ヲ合併スル能ハサルナリ何トナレハ管轄專屬ナルトキ
ハ決シテ之ヲ變換ス可ラサレハナリ(本法第三十一條)

又受訴裁判所ハ便宜ニ依リ數箇ノ訴訟ヲ分離シ若ハ合同セ
シムルコトヲ得可シ載セテ本法第百十八條第百二十條ニ規
定セリ

第二項ハ本訴ト反訴ト合算ス可ラサルヲ規定セルモノニ
シテ固ヨリ當然ノ法制ナリ抑本訴ト反訴トハ互ニ其訴人ヲ

債権ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル
物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依
ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額
ニ依ル
十六
異ニスルヲ以テ其シヤ之ヲシテ合算セシメントスルモ到底
爲シ能ハサルモノトス

[參照] 現行民法

獨 第五條 一訴訟ニ於テ申立テタル數個ノ請求ハ之ヲ合
算スルモノトス訴訟事件ト反訴事件ノ合算ハ之ヲナスコ
トヲ得ス

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル
物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依
ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額
ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ

依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承
役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役
ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減
額ニ依ル

第三 賃貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時
期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル
借賃ノ額ニ依ル但一ケ年借賃ノ二十倍ノ
額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額
ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟
物ナルトキハ一ケ年收入ノ二十倍ノ額ニ
依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付

テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨ
リ寡キトキハ其額ニ依ル

〔字解〕

地役トハ一ノ土地カ他ノ土地ノ爲メ義務ヲ負エルコトノ名
稱ニシテ例ヘハ甲地ヨリ乙地ヲ通行スルノ權利又甲地カ乙
地ヨリ汲水スルノ權利ヲ有セルカ如シ而シテ權利アル土地
即チ前例ニテ甲地ハ要役地ニシテ義務アル土地即チ乙地ハ
承役地ナリ

〔解義〕〔的例〕〔比較〕

本條ハ訴訟物ノ價額ヲ定ムルニ當リ最モ疑義ヲ生シ易キモ
ノヲ舉示シテ其價額ヲ定ムル方法ヲ示定セリ
民法ニ依ルニ債權ノ擔保ヲ對人擔保、物上擔保ノ二種ニ分テ

リ猶ホ對人擔保ハ保證、連帶、任意ノ不可分トシ物上擔保ハ留
置權、動產質、不動產質、先取特權、抵當トナセリ而シテ對人擔保
物上擔保ハ孰レモ債權ノ擔保ニシテ即チ權利者ノ權利ヲ保
證スルモノナリ故ニ債權ハ主ニシテ擔保ハ之方從タルニ過
キス此ニ債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ヲ訴
訟ノ目的物トシテ訴フルトキ其價額ハ主タル債權ニ依ラン
カ將タ擔保又ハ擔保ノ從タル物權ニ依ランカ頗ル疑義ヲ生
シ易シ則チ本法ハ之ヲ斷定シテ主タル債權ノ額ニ依リ若シ
物權ノ目的物ノ價額債權ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ルヘ
シトセリ故ニ債權ノ價額五拾圓ニシテ物權ノ目的物ノ價額百
五拾圓ナルトキハ債權五拾圓ニ依ルヲ以テ區裁判所ノ管轄
トナス反之債權ノ額百五拾圓ニシテ物權ノ目的物ノ額五拾

圓ナルトキハ價額寡ナキ目的物ニ依ルヲ以テ猶ホ區裁判所ノ管轄ニ屬ス

本法ニ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權トアルハ即チ物上擔保ノコトナリ右從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其價額カ債權ノ價額ヲ超過スルトキニ限り債權ノ價格ニ依ル可キヲ以テ裁判官ハ是等ノ訴訟起ル毎ニ必ス先ツ其物件ノ價額ヲ調査セサル可ラス初メ原告ヨリ訴狀ヲ呈出スルトキ之ニ物件ノ價額ヲ記入セシムルヲ要ス

地役カ訴訟物ナルトキハ要役地カ地役ニ依リ得ル所ノ利益額ニ依ル若シ要役地ノ得ル所ヨリモ地役ノ爲メ承役地ノ減額多キトキハ其減額ニ依ラサル可ラス而シテ其増價額及ヒ減額價ヲ算定スルハ頗ル困難ナリトス試ニ之ヲ例センニ甲

乙相鄰セルニ地アリ甲地ハ袋地ニシテ通路ナキカ或ハ迂回ノ不便アルヲ以テ鄰地ナル乙地ニ對シ通行權ヲ約セリ初メ甲地ハ袋地ニシテ通路ナク又迂回セシ爲メ地所ノ價額僅ニ五拾圓ナリシニ隣地ニ通行權ヲ得大ニ便利トナリタルカ爲メ百圓ノ價額トナレリ此場合ニ於テハ要役地ノ得ル所ノ増價ハ五拾圓ナルヲ以テ區裁判所ノ管轄ナリトス反之乙地ハ初メ價額三百圓ナリシニ甲地ニ通行權ヲ與ヘタル爲メ價額百五拾圓ニ減シタリトセンニ此時ハ其減額増額ヨリ多キヲ以テ地方裁判所ニ訴ヘサル可ラス又甲地ハ大ニ山水ノ眺望ニ富メリ其前ニ在ル乙地ニ對シ建築又ハ植樹シテ其眺望ヲ妨ケサルコトヲ約セリ此場合ニ於テモ乙地ニ建築スルト否トニ依リ大ニ甲地ノ價額ニ影響ヲ及ス可シ又乙地モ建築ス

ル能ハストスルトキハ大ニ權利ヲ制限スルヲ以テ其地價ヲ減スルヤ必セリ増額ト云ヒ減額ト云フ要スルニ是等ノ場合ヲ指稱スルモノナリ

賃貸借又ハ永賃借ノ契約ノ存否又ハ其期限ニ付(或ハ解約ノ豫告或ハ賃貸ノ繼續ニ關シ)訴訟起ルトキハ其賃借ノ全期限ニ相當スル借賃ノ額ヲ以テ標準トス例ヘハ一ケ年ニ拾圓ノ借賃ニシテ十ケ年ノ期限ナルトキハ貳百圓ノ價額ナリトス若シ一ケ年借賃ノ二十倍ノ額ヲ全期限ニ相當スル借賃ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ラサル可ラス即チ全時期ヲ三十年トセンニ一ケ年借賃ノ三十倍ナルヲ以テ此時ハ之レヨリ寡キ二十倍ノ額ヲ標準トス可シ

又

本法ニ定ムル場合ト裁判所構成法第十四條ニ定ムル區裁判

所ノ管轄ニ屬スル場合ト混同ス可ラス構成法第十四條ハ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル場合ニシテ決シテ契約ノ有無又ハ期限ニ關スル訴訟ニアラス抑是等ノ場合ヲ區裁判所ニ屬セシメタル所以ノモノハ概テ其事件ノ輕微ニシテ迅速周到ヲ要スルト且局地ノ狀況ヲ熟知スル裁判所ノ裁判ニ付スルヲ良トスルニ在リ

定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利ヲ訴訟物ナルトキハ一ケ年^〇收入ノ^〇二十倍ニ依ル若シ期限定マリタルモノニ付テハ將來ノ收入總額二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ラサル可ラス而シテ供給又ハ收益ニ付テノ權利ヲ訴訟物トナルキハ

done

必ス獨立セサル可ラス何トナレハ若シ他ノ主タル權利ニ附從スルモノナルトキハ本法第三條第二項ニ準據セサル可ラサレハナリ彼ノ遺言上契約上ノ年金其他小作ノ權利上ニ關シ單獨ニ爭訟セル如キハ即チ本條ニ屬ス

〔辨疑〕

茲ニ債主三人アリ各同一ノ不動産ヲ抵當ニ取レリ後三人トモ負債者ヲ訴ヘ遂ニ抵當不動産ヲ公賣シ債主ノ中一人先取權ヲ以テ若干圓ヲ領收セリ然ルニ其殘額ニ對シ餘ノ債主二人互ニ先取權ヲ爭ヘリ此時訴訟物ノ價額ハ何レニ依ル可キカ曰ク其殘額ニ依ル可クシテ當初ノ請求價額ニ依ル可ラサルナリ何トナレハ抵當權ハ起訴ノ原由ニシテ訴訟ノ物件ニアラサレハナリ

此
時

又賃貸借ノ場合ニ關シ年期中物價ノ高低ニ依リ賃料ヲ定ムルコトヲ約セリ然ルニ期限半ハニシテ爭訟ヲ起セリ此時何レノ價額ニ依テ定ムヘキヤ曰ク本法第六條ニ依リ裁判所ノ意見ヲ以テ定メサル可ラサルナリ

〔參照〕

獨 第六條 訴訟事件ノ價額ハ訴訟ノ事件物件ノ現有ナルトキハ其價額ニ依リ要求ノ保證又ハ質主權ナルトキハ其要求ノ額ニ依リ之ヲ定ルモノトス質主權ノ物件要求額ヨリ低價ヲ有スルトキハ其低價ヲ標準トス
全 第七條 地所使用權ノ價額ハ使用スル地所ノ爲メ使用權ノ有スル價額ニ依リ之ヲ定メ使用權ノ爲メ使用セラル、地所ノ價額ヲ減少スルノ額其價額ヨリモ大ナルトキハ

此減少額ニ依リ之ヲ定ルモノトス

全 第八條 借地又ハ賃借ノ關係ノ現存又ハ繼續訴訟事件トナル場合ニ於テハ訴訟トナリタル全期限ニ收入スル賃料ノ額ヲ以テ價額算定ノ標準トシ一年間賃料ノ二十五倍額前ノ額ヨリ少キトキハ其少額ヲ以テ價格算定ノ標準トナスモノトス

全 第九條 復歸スル使用又ハ供給ニ關スル權利ノ價額ハ一年間收入ノ價額ニ依リ左ノ如ク算定スルモノトス
收入權ノ將來消滅スルコト確カナルモ其消滅期限確カナラサルトキハ十二倍半ノ額
收入權ノ期限制限ナキトキ又ハ確定シタルモノナルトキハ二十五倍ノ額但收入權ノ期限確定シタルモノナル場合

ニアリテ將來收入ノ全額前ノ額ヨリ少キトキハ此全額ヲ以テ標準トス

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム
裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕

本條ハ訴訟物件ノ價額ニ依テ裁判所ノ管轄ヲ異ニスル場合ニ於テ其訴訟物件ノ價額確定シ難キ時裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ示定セリ
訴訟物ノ價額ニ關シ争ヒアルトキ其他被告ノ欠席ニ依リ價

額ノ審定ヲ要スル等ノ場合ニ於テ裁判所ハ任意ニ之ヲ定ムルヲ得ルハ猶ホ當事者ノ間損害ノ生否及ヒ損害ノ額又ハ賠償スヘキ利益ノ額ニ付争ノ起リタルトキ總テノ情况ヲ酌量シ心證ヲ以テ之ヲ裁決スルコトヲ得ルト同一ナリ而シテ裁判所ハ之カ價額ヲ定ムルニ付本法第一百七條ノ原則ニ基キ檢證若クハ鑑定人ヲ命スルコトヲ得可シ又裁判所ハ任意ニ決定シ得可キヲ以テ必ス提出セラレタル證據ヲ採用スルノ義務ナキノミナラス更ニ立證ノ結果ニ拘束セラル、コトナシ然レトモ裁判所ハ本法第三條乃至第五條ノ規定ヲ遵奉セサル可ラス

〔參照〕

獨 第三條 訴訟事件ノ價額ハ裁判所其見込ヲ以テ之ヲ定

ルモノトス裁判所ハ申立タル採證ヲ命シ並ニ職權ヲ以テ檢證處分及鑑定人ノ鑑定ヲ命スルヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ地方裁判所ノ言渡ニ對シ上訴ヲ許サ、ル場合ヲ示定セリ

本條及ヒ次條ハ同一ナル訴權ニ關シ事物ノ管轄ノ言渡ニ付二個ノ裁判所ニ於テ互ニ撞着スル言渡ヲ爲スコトヲ豫防セントスルニ在リ

地方裁判所ニ於テ一旦判決シタル上ハ其事件カ區裁判所ニ

屬スヘカリシテ理由トシテ上訴ヲ爲スコトヲ許サス何トナ
レハ元合議裁判所ハ單獨ナル區裁判所ヨリハ其裁判完全ナ
リト推測スレハナリ

本條ノ正文ヲ詭味スルトキハ區裁判所ノ判決ニ對シテハ地
方裁判所ニ屬スヘキテ理由トシテ不服ヲ訴フルコトヲ得ヘ
キカ如シ然レトモ本法第三十條第二百六條ニ依ルトキハ本
案ノ辨論前抗辨セサル時ハ後日ニ至リ之ヲ訴フル能ハサル
ハ明カナリ但專屬管轄ニ屬スルトキハ格別ナリ

〔參照〕

獨 第十條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ區裁判所ノ權限
ニ屬スルテ理由トシテ不服ヲ申立ルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判

所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキ
ハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ヲ羈
束ス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ確定シタル管轄違ノ言渡ニ關シ示定セリ
本條ノ法制タル蓋シ已ヲ得サルニ出ツルモノナリ原則上ヨ
リ論スルトキハ己レニ管轄權限ナキトキハ斷然管轄違ノ言
渡ヲ爲シテ可ナリ然ルニ本條ニ於テハ區裁判所又ハ地方裁
判所カ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其裁判確定シタルトキハ後ニ其
事件ノ繫屬スヘキ裁判所ニ於テ必ス管轄審判セサル可ラス
ト爲セルハ既ニ一ノ裁判所ニ於テ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其裁
判確定スルトキハ再ヒ之カ審判ニ委スル能ハサレハナリ

本條ハ事物ノ管轄ニ付云々トアルヲ以テ土地ノ管轄ニ付テハ後ニ其事件ノ屬ス可キ裁判所ヲ拘束スルコトナシ故ニ若シ其管轄ニ非ラスト思料スルトキハ管轄違ヲ宣告シテ可ナリ此時ハ裁判所構成法第十條第四ニ依リ直近ノ上級裁判所ニ管轄ノ指定ヲ申請セサル可ラス

〔參照〕

獨 第十一條 事件上裁判所ノ權限ニ付テノ規定ニ依リ裁判所ノ權限違ナルコトノ言渡確定シタルトキ其裁決ハ其後事件ノ裁判關係トナル裁判所之ヲ遵守スヘキモノトス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判

所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ
區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ
移送ノ申立ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ
移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

〔解義〕

本條ハ前條ト牽連セルモノニシテ即チ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ノ宣告ヲ爲ス時ニ當リ遵奉ス可キ規則ヲ示定セリ

地方裁判所カ事物ニ付管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ其事件ヲ自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ移送スル旨ヲ言渡サ、ル可ラス然レトモ原告ノ申立ナキ時ハ敢テ關涉スルヲ要セス

區裁判所カ前ニ同シク管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ之ト同時ニ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送スルトキ言渡サ、ル可ラス此場合ニ於テモ必ス原告ノ申立アルヲ要ス原告カ移送ヲ申立ツルニハ其判決ニ至ル前即チ最終ノ辨論ニ於テセサル可ラス然レトモ若シ辨論ノ際之カ申立ヲ怠リ爲メニ移送ノ判決ヲ受ケサルトキト雖モ決シテ區裁判所又ハ地方裁判所ニ訴フルノ道ヲ失フコトナシ唯此場合ニ於テハ新ニ訴訟ヲ起スノ差アルノミ

移送言渡ノ判決確定スルトキハ其訴訟ハ初ヨリ移送ヲ受ケタル裁判所ニ起シタルモノト看做サル、ヲ以テ新ニ起訴スル如キ手續ヲ要セス猶ホ初メ裁判所ニ於テ生シタル費用モ後ノ裁判所ニ於テ生シタル費用トシテ處分セラル、モノトス

〔參照〕

獨 第二百四十九條 事件上裁判所ノ權限ニ付テノ規定ニ依リ裁判所ノ管轄違ヲ言渡ストキハ同時ニ原告ノ申立ニ依リ訴訟ヲ其管轄内一定ノ區裁判所ニ移付スヘキモノトス

其判決確定シタルトキ訴訟ハ區裁判所ニ於テ裁判關係トナリタルモノトス

全 第四百六十六條 裁判所ノ管轄違フ事件上權限ニ付テノ規定ニ依リ言渡ストキハ同時ニ原告ノ申立ニ依リ訴訟ヲ地方裁判所ニ移付スヘキモノトス
其判決確定シタルトキハ其訴訟ヲ地方裁判所ニ於テ裁判關係トナリタルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル
普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

[解義]

本節第十條以下ハ土地ノ管轄ニ付示定セリ

土地ノ管轄ノ何タルコト及ヒ土地ノ管轄ト事物ノ管轄ノ差異トハ本法第一條ノ解義ニ詳悉セリ

第一項ハ人ノ住所ハ即チ其人ノ普通裁判籍ナルコトヲ示セリ後條ニ至リ特別ノ裁判籍ナルモノヲ視ル可シ是ニ於テカ能ク普通ノ文字ヲ了解スルコトヲ得可シ

住所トハ人ノ常ニ生活スル場所ヲ云フ而シテ各人ノ住所何所ニアルヤニ至テハ民法ニ依リ決定スヘキコトナリ人若シ數多ノ裁判所管轄區内ニ於テ數多ノ住所ヲ有スルトキハ隨テ數多ノ普通裁判籍ヲ有ス

本條所謂人トハ有形人無形人(即法人)内外國人ヲ包含セリ第二項ハ普通裁判籍アル地ノ裁判所ヲ以テ其人ニ對スル訴訟ノ管轄裁判所ナルヲ示セリ原告ハ被告カ當ニ其管轄ニ

屬シアラサル可ラサル義務アル處ニ就テ自己ノ權利ヲ伸暢セサル可ラス即チ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キトアルハ被告ニ付テ云フモノナリ故ニ裏面ヨリ云フトキハ被告ハ管轄外ノ審理ニ應セサルノ權利アリトス
 又普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル訴ニ付管轄ヲ有スルト雖モ本條ハ訴ニ付專屬裁判籍ヲ定ムル場合ヲ例外ニ附セリ專屬裁判籍トハ特ニ或ル裁判所ニノミ訴訟ヲ管轄セシムルノ謂ヒニシテ本法第二十二條第三百八十三條第五百六十三條ノ如キ是ナリ

〔參照〕

獨 第十二條 人ノ普通裁判管轄ヲ有スル裁判所ハ其人ニ對シ提起スヘキ總テノ訴訟ニ付權限ヲ有スルモノトス但

訴訟ニ付特別裁判管轄ヲ定メタルトキハ此限ニアラス
 全 第十三條 人ノ普通裁判管轄ハ其住處ニ依テ定マルモノトス

第十一條 軍人軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人軍屬ニ之ヲ適用セス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ軍人軍屬ニ關スル普通裁判籍ニ付示定セリ
 軍人軍屬ハ裁判上屯營所ヲ以テ住所トナス即チ軍人軍屬ニ對シ訴ヲ起スルハ屯營所々在地ノ裁判所ヲ以テ管轄トナス而シテ軍人軍屬ハ陸軍ニ屬スルモノト海軍ニ屬スルモノト

ノ二種アリ海軍中軍艦附ノ者ハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トナス然レモ屯營所若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トスルハ常備軍人ニ限レリ故ニ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル者即チ戰爭アルニ際シ一時兵役ニ就ク者國民軍籍ニ在ル者若クハ非役士官ノ如キハ常人ト全シク常ニ生活スル場所ヲ以テ住所トナス夫レ如此區別スル所以ノモノハ自然ノ道理ニ基ケルモノナリ何トナレハ常備軍人ニ在テハ屯營所若クハ軍艦定繫所ニ常住シ其餘ノ軍人ニ在テハ常ニ本住所ニ在レハナリ

然レモ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人軍屬ニ對シ財産權上ニ付テノ訴ハ原告ノ撰テ以テ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ起スコトヲ得可シ(本法第十五條第二項)是

レ特別裁判管轄トシテ一ノ便法ヲ設ケタル所以ナリ

常備軍ニ屬スルモノハ平時編制隊ノ軍人ニシテ概テ左ニ掲グルモノナ云フ

士官軍醫及ヒ軍吏其任官ノ當日ヨリ免官ノ時期ニ至ル

降伏軍人即チ降伏ノ日ヨリ其終期又ハ降參議約ノ取消ニ至ル

隨意兵及ヒ新募生兵軍部ニ於テハ給養ヲ爲スノ日ヨリ又隨意兵ハ現ニ軍隊ニ編入セラレタル日ヨリ其ニ其常備服役ヲ終ルノ日ニ至ル

軍部ノ文官ハ其任官ノ日ヨリ以テ解任ノ日ニ至ル

〔參照〕

獨 第十四條 軍人ハ裁判管轄ニ付キ屯營地ニ其住所ヲ有

スルモノトス

此規定ハ專ラ兵役義務履行ノ爲メ服役シ又ハ獨立シテ住所ヲ有スルコト能ハサル軍人ニハ之ヲ適用セサルモノトス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官

吏竝ニ其家族從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ一定ノ官吏ニ對スル普通裁判籍ニ付示定セリ

外國ニ差遣セル本邦ノ公使即チ全權大使全權公使辨理公使

代理公使及ヒ公使館ノ官吏(即チ書記官交際官書記生其他ノ官吏)並ニ該官吏ノ家屬從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ最後ニ有セシ住所トス最後ノ住所トハ本邦ヨリ差遣セラレ、際住居セシ場所ヲ云フ若シ此等ノ者ニシテ住所ナキハ東京市内ノ或區ヲ以テ住所トス而シテ該區ニ付テハ司法大臣ノ豫定セル所ニ從フ

抑外交官吏ノ資格アル人ヲシテ治外法權ノ權利ヲ享受セシムルハ萬國公法上一定セル所ナリ故ニ身ハ外國ニ在ルモ恰モ内國ニ在ルト同一ナル取扱ヲ受クルモノナリ本條ノ規定セル所即此原則ヲ當行スルニ過キス而シテ是等ノ官吏ノ家屬從者ニ對シ同一ノ規定ヲ與フル所以ノモノハ畢竟公使又ハ官吏ニ附屬スルヲ以テナリ

〔參照〕

獨 第十六條 治外法權ノ權利ヲ有スル獨逸人並ニ外國ニ於テ任用セラレタル獨逸國又ハ一邦ノ官吏ハ裁判管轄ニ付キ其本國內ニ有セシ住所ニ從フモノトス其住所ナキトキハ本國ノ首府ヲ其住所ト看做シ其首府數個ノ裁判管轄ニ分ルヽトキ住所ト看做スヘキ管轄地ハ司法省一般ノ布達ヲ以テ之ヲ定ム

撰任領事ニハ此規定ヲ適用セサルモノトス

第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依リテ定マル

然レモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限り前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

〔解義〕

本條ハ現在地ニ於ケル普通裁判籍ニ付示定セリ
 內國ニ住所ヲ有セサルコト確然セルハ本人ノ現在地ヲ以テ普通裁判籍トナス
 本人ノ現在地トアルニ依リ仮令一時ノ滞在ニテモ被告力將ニ起訴セラレントスルノ當時裁判所管轄區内ニ居留シアリテ而シテ訴狀ノ送達ヲ爲シ得ルノ時限間猶ホ居留スレハ可ナリトス若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ヲ以テ裁判籍トナス

外國ニ住所ヲ有セル者ニ對シテハ内國ニ於テ權利關係ヲ生シタル片ニ限り其最後ニ有セシ内國ノ住所ヲ以テ裁判籍トナス若シ然ラサル片ハ内國何所ノ裁判所ニ於テモ出訴スルコト能ハサルナリ

〔理由〕

本條ハ原告ヲ保護スルノ趣旨ニ出ツルモノトス

〔比較〕

本條第一項ハ本法第十五條ト混同ス可ラス本條ハ内國ニ住所ヲ有セサル片ニ限り一ノ便法ヲ設ケ其現在地ヲ以テ裁判籍ト定メタルモノニシテ反之本法第十五條ハ一定ノ住所アリテ勿論普通裁判籍ヲ有セリト雖モ或地方ニ永ク在寓スルヲ以テ又特別裁判籍トシテ同所ヘモ起訴スルコトヲ許セル

モノナリ

〔辨疑〕

本條第一項ノ場合ニ於テ被告執達吏ヲ避ケテ隱匿シ又ハ本法第四百四十五條第一項ノ場合ノ如ク送達ヲ執行シ能ハサル時ハ如何ニ處置シテ可ナランカ曰ク原告ニ於テ被告カ送達ノ當時現在セシコトヲ舉證スル上ハ本法第四百四十五條第二項ノ手續ヲ斷行シ得ヘキナリ

〔參照〕

獨 第十八條 住所ヲ有セサル人ノ普通裁判管轄ハ獨逸國內ノ滯在地ニ依テ定マリ此滯在不明ナルトキハ最終ノ住所ニ依テ定マルモノトス

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表

スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ
國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定
ム
公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルルコ
トヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判
籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ
定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナ
キトキ又ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキハ其首
長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

〔字解〕

法。人。ト。ハ。語。ヲ。換。ユ。レ。ハ。無。形。人。ト。云。ハ。ル。義。ニ。シ。テ。法。律。上。一。個
人。ト。看。做。ス。所。ノ。モ。ノ。ナ。リ。法。人。ハ。常。人。ト。均。シ。ク。權。利。ヲ。得。義。務

ヲ。負。フ。ヲ。得。ル。而。シ。テ。公。ノ。法。人。ト。ハ。官。廳。市。町。村。ノ。如。キ。ヲ。云。ヒ
私。ノ。法。人。ト。ハ。諸。多。ノ。商。事。會。社。ノ。類。ヲ。云。フ

社。團。ト。ハ。共。同。結。社。ト。云。ヘ。ル。義。ニ。シ。テ。會。社。組。合。協。會。ノ。如。キ。モ
ノ。代。名。詞。ナ。リ。即。チ。社。團。ハ。類。ニ。シ。テ。會。社。組。合。ハ。種。ナ。リ。例。エ
ハ。社。團。ハ。動。物。ニ。シ。テ。會。社。組。合。ノ。如。キ。ハ。馬。又。ハ。牛。ト。云。フ。ニ。同
シ

財。團。ト。ハ。財。ノ。集。マ。リ。ト。云。フ。ノ。義。ニ。シ。テ。救。恤。金。庫。義。捐。所。又。ハ
遺。留。セ。ラ。レ。タル。相。續。財。產。解。散。シ。タル。會。社。ノ。財。產。其。他。管。財。人
ノ。管。理。ニ。歸。シ。タル。財。產。ニ。シ。テ。未。タ。所。有。主。ノ。定。マ。ラ。サル。如。キ
ヲ。云。フ。社。團。ト。財。團。ト。ハ。只。人。ニ。關。ス。ル。ト。財。ニ。關。ス。ル。ト。ノ。差。ア
ル。ノ。ミ

〔解義〕

本條ハ法人ニ對スル普通裁判籍ヲ示定セリ
國ニ對シテハ訴訟ニ付國ヲ代表スル官廳ノ所在地ヲ以テ普
通裁判籍トナス而シテ訴訟上國ヲ代表スルハ何レノ官廳ナリ
ヤ又如何ナル手續ヲ以テ代表スルヤハ他日勅令ヲ以テ定メ
ラルヘシ

公私ノ法人及ヒ法人ノ資格ヲ以テ訴ラル、コトヲ得ル會社其
他ノ社團財團等ニ對シテハ別段ノ定メナキハ事務所所在ノ
地ヲ以テ普通裁判籍トナス若シ事務所ノ設ケアラサルカ又
ハ數所ニテ事務ヲ取扱フルハ首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ
以テ普通裁判籍トナス

⑤ 其資格ニ於テ訴ヘラル、コトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團
トアルハ純然タル法人ニアラサルモ法人ト均シク訴訟上被

告トナリ得ルモノヲ指稱ス即チ民事會社共同組合協會等ノ
如キ是ナリ

〔參照〕

獨 第十九條 町村團結並ニ其資格ヲ以テ出訴セラル、コ
トヲ得ル會社組合又ハ其他協會、義捐物、公場及財産ノ普通
裁判管轄ハ其所在地ニ依テ定マルモノトス此所在地ト看
倣スヘキモノハ別段ノ定メアルニアラサレハ其管理ヲナ
ス地ナリトス
鑛業組合ハ鑛坑ノ所在地ヲ管轄スル裁判所ニ普通裁判管
轄ヲ有シ其資格ヲ以テ出訴セラル、コトヲ得ル官署ハ其
署所在地ノ裁判所ニ普通裁判管轄ヲ有スルモノトス
本條ニ規定シタル裁判管轄ノ外申合規則又ハ其他ノ方法

ニ依テ特ニ定メタル裁判管轄ヲ許スモノトス
全 第二十條 國庫ノ普通裁判管轄ハ訴訟ニ付國庫ヲ代理
スルカ爲メ任セラレタル官署ノ所在地ニ依テ定マルモノ
トス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得
兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

〔解義〕

本條以下ハ特別裁判籍ヲ示定セルモノナリ生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對シテハ普通裁判籍ヲ措キ其現在地ノ裁判所ニテモ訴ヲ起スコトヲ得可シ是レ原被告双方ニ便宜ヲ與フルモノナリ
本條ニハ財産權上ノ請求ニ付云々トアリ故ニ身分ニ關スル訴訟ナド苟モ財産請求以外ニ係ルモノハ普通ノ裁判籍ニ從ハサル可ラス

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ財産權上ノ請求ヲ爲スコトヲ得ヘシ此事ハ第十一條中ニ解釋セリ

〔參照〕

獨 第二十一條 其性質ニ依リ長キ滞在ヲ要スヘキ關係ヲ

以テ一定ノ地ニ滞在スル者特ニ從僕手職工製造所勞役者、營業手傳人大學生徒學生又ハ徒弟トナリテ一定ノ地ニ滞在スル者ナルトキ之ニ對シ財産權上請求ニ關シ提起スル總テノ訴訟ニ付テハ其滞在地ノ裁判所權限ヲ有スルモノトス此規定ハ專ラ兵役義務履行ノ爲メ服役シ又ハ獨立シテ住所ヲ有スルコト能ハサル軍人ニモ亦之ヲ適用ス但滞在地ノ裁判所ニ代ルモノハ屯營地ノ裁判所ナリトス

第十六條 製造商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者用益者又ハ賃借人ニ對スル訴ニ

付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

〔解義〕

本條ハ營業事務所ニ關スル特別裁判籍ヲ示定セリ製造商業其他ノ營業ニ付各所ニ支店ヲ設ケ本店ト獨立シテ取引ヲ爲スコトアリ銀行ノ如キ瀛車鉄道ノ如キ各所ニ支店ヲ設ケテ諸取引及ヒ運漕業ヲ扱フコト多シ此場合ニ於テハ其店舗ト營業ニ關シ直接ニ取引ヲ爲ス片ニ限リ店舗所在地ノ裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ得可シ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者用益者又ハ賃借人ニ對シテモ前ト同シク住家及ヒ建物ノ所在地ノ裁判所ニ起訴スルコトヲ得ヘシ

住家及ヒ農業用建物アル地所トハ地所耕作ノ爲メ耕作地等
ハ居宅又ハ建造物ヲ設クル場合ヲ云フモノナリ故ニ庭園ヲ
具備スル爲メ別荘ヲ設クル如キハ本條ニ適セス而シテ住家
建造物アル地所ヲ利用スルキト雖モ訴力地所ノ利用上ニ涉
ラザルハ普通裁判籍ニ從ハサル可ラス

〔辨疑〕

土地ノ所有者其土地ヲ耕作スル爲メ之ニ本住家ヲ設クルハ
ハ本法第十條以下ノ普通裁判籍ニ屬ス可キヲ以テ本條第二
項中住家アル土地ヲ利用スル所有者トアルハ畢竟贅文ニ屬
スルカ如シ如何曰ク土地ノ所有者其地ニ常住スル時ハ固ヨ
リ普通裁判籍ナレモ本條ハ所有者カ他人ヲ備フテ耕作セシ
ムルカ或ハ己レ時々耕作ニ出ツル爲メ便宜上住家ヲ設クル

等ノ場合ヲ豫定セルモノナリ

〔參照〕

獨 第二十二條 製造商業又ハ其他ノ營業ヲナス爲メニ直
接ニ取引ヲナス店舗ヲ有スル者ナルトキ其店舗ノ取引ニ
關係ヲ有スル總テノ訴訟ハ其者ニ對シ其店舗所在地ノ裁
判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

其店舗ノ裁判管轄ハ住家及農用建造物ヲ有スル地所ヲ其
所有者入額所得者又ハ借地人トナリテ耕作スル者ニ對ス
ル訴訟ニ付テモ効アルモノトス但此訴訟ハ地所ノ耕作ニ
關スル權利上關係ニ係ルトキニ限ル

第十七條 内國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル
財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財産又ハ訴ヲ爲

シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其財産ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財産ノ所在地トス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ財産權上ノ請求ニシテ内國ニ住所ヲ有セサル者ニ對スル訴訟ハ其人ノ財産地又ハ請求スル物品所在地ノ裁判所ニ於テ管轄ス可キコトヲ示定セリ外國ニ住所ヲ定ムル義務者又ハ内國ニ住所ヲ定ムルヲナク漫ニ漂寓スル義務者ニ對シテ權利者ヲ保護スルニ在リ
元來本條ノ趣義タル内國ニ現在スル財産ヲ強制執行ノ物件

ト爲スヲ以テ主眼トスルニ在リ是レ債務者ニ對シ財産權ニ關スル請求ニ制限シタル所以ナリ而シテ財産權上ノ請求タル上ハ如何ナル原因ニ出ツルモ何所ニテ發生セシモ又自己ノ權利ニ因スルト他人ノ權利ヲ讓受ケタルトナ問ハサルナリ本條ハ債務者ノ財産中債權ニ係ルモノハ債務者ノ住所ヲ以テ財産所在地トシ又債權ニ付物カ擔保スルモノハ其物ノ所在地ヲ以テ財産所在地トセリ而シテ後ニ在ル債務者ハ被告ニ對スル債務者ヲ指稱セルモノニシテ決シテ原告ニ對スル債務者ヲ云フニアラス本條特ニ(括弧)ヲ設ケ第三債務者ト割註セシ所以ナリ詳ニ言ハハ被告カ債權ヲ有スルキハ必ス其債權ニ對スル債務者ナカル可ラス本條ニ第三債務者トアルハ即チ之ヲ稱スルモノナリ此場合ニ於テハ第三債務者ノ住所ヲ

以テ裁判管轄地トシ又債權カ物ヲ以テ擔保セラル、片例ハ
ハ地所ノ抵當又ハ先取特權ヲ以テ保証セラル、其ハ其物ノ
現在地ヲ以テ裁判管轄地トナス

本條ノ裁判管轄ハ出訴ノ際財産若クハ物件カ受訴裁判所管
轄区内ニ存在スルヲ以テ可トス仮令ヒ其後ニ於テ財産ヲ他
ニ移轄セシムルモ決シテ既定ノ管轄上ニ影響ヲ及ホスコトナ
シトス

〔參照〕

獨 第二十四條 獨逸國內ニ住所ヲ有セサル者ニ對スル財
産權上請求ニ係ル訴訟ニ付テハ其財産又ハ訴訟ヲ以テ請
求セラレタル物件ノ存在スル地ヲ管轄スル裁判所權限ヲ
有スルモノトス

要求ニアリテ財産ノ所在地ト看做スヘキモノハ負債者ノ
住所ナリトシ要求ニ付キ物件其保證ノ責ヲ負フトキハ亦
其物件ノ所在地ナリトス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其
履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不
十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義
務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

〔字解〕

銷除トハ無能力又ハ錯誤、強暴、詐欺ニ依リ承諾ヲ與ヘシ契約
ヲ取消スコトヲ云ヒ廢罷トハ債務者カ債權者ヲ詐害シテ第三
者ト爲シタル契約ヲ廢棄スルヲ云ヒ解除トハ未必條件ノ成
就スルトキ若クハ雙務契約ニテ一方違約シタル片其契約ヲ

解除スルヲ云フ而シテ以上ニ付テハ民法財産編第五百四十四條乃至第五百六十一條ニ規定セリ

〔解義〕

本條ハ契約ニ關スル裁判管轄即チ被告カ契約ヲ履行スヘキ地ノ裁判所之ヲ管轄ス可キヲ示定セリ
契約ノ成立若クハ不成立ヲ確定スル訴、契約ノ履行若クハ契約ノ消除、廢罷、解除ヲ求ムルノ訴、契約ノ不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ヲ求ムルノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行スヘキ地ノ裁判所ニ起スコトヲ得ヘシ故ニ被告ハ其裁判所管轄區内ニ現住スルヲ要セス又其管轄區内ニ財産ヲ有スルコトヲモ要セサルナリ
本條ハ契約ヲ履行スヘキ地ニ付キ豫メ明諾默諾ニ依リ之ヲ

定ムルヲ要セス苟モ契約履行地ト爲シ得ル限りハ渾テノ場合ニ方テ起訴シ得ヘキ趣義ナリ
義務ヲ履行ス可キ地ニ付テハ民法ノ定ムル所ニシテ例ヘハ賣買ノ場合ニ於テ物品引渡ハ賣主ノ住所ニ於テシ其代價ノ拂出ハ買主ノ住所ニ於テスルカ如キ是ナリ

〔參照〕

獨 第二十九條 契約ノ成立又ハ不成立ノ確定契約ノ履行又ハ解除ニ關スル訴訟並ニ契約不履行又ハ不當ナル履行ニ付テハ損害要償ニ關スル訴訟ニ付テハ訴訟トナリタル義務ヲ履行スヘキ地ノ裁判所權限ヲ有スルモノトス

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ

訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

〔解義〕

本條ハ會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又社員ヨリ全社員ニ對スル訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ起スヲ得ヘキコトヲ示定セリ其請求ノ訴旨タル社員ノ資格ニ基クルニ限レリ若シ社員ノ資格ニアラサル訴ナルハ普通裁判籍ニ從ヒ其者ノ住所地ノ裁判所ニ起サ、ル可ラス本條ハ須ラク本法第十四條ト參看スヘキモノトス

〔參照〕

獨 第二十三條 町村、團結會社、組合又ハ其他協會ノ普通裁判管轄ヲ有スル裁判所ハ此等ノ者ヨリ仲間タルノ資格ニ

於ケル仲間ニ對シ又ハ其仲間中ニ於テ其資格ヲ以テ提起スル訴訟ニ付權限ヲ有スルモノトス

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

〔字解〕

不正ノ損害トハ有意又ハ過失ヨリ他人ニ損害ヲ負セタルヲ云フ即損害ノ所爲カ有意ニ出タルハ民事ノ犯罪トナシ又無意ニ出タルハ准犯罪トナスコト民法財産篇第三百七十條以下ニ規定セリ

〔解義〕〔理由〕

本條ハ不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ起スヘキコトヲ示定セリ

蓋シ行爲ノ有リタル地ノ裁判所ニ訴フルルハ損害ノ事實明
確ニシテ舉證ニ便ナルト隨テ迅速ニ訴訟ヲ結了スルヲ得レ
ハナリ

〔參照〕

獨 第三十二條 不法ノ行爲ヨリ生スル訴訟ニ付テハ其行
爲ヲナシタル地ノ管轄裁判所權限ヲ有スルモノトス

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替
金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ
多寡ニ拘ラス本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起ス
コトヲ得

〔解義〕

本條ハ事實上ノ牽連事件ニ對スル裁判管轄ヲ示定セリ

辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對
スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ラス本訴訟ノ第一審裁判
所ニ起スヲ得ヘシ
訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ラストアリ故ニ價額百圓ヲ超過ス
ルト雖モ區裁判所ニシテ本訴訟ノ第一審裁判所ナルモハ猶
ホ其裁判所ニ訴フルヲ得ヘシ
本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スヲ得トアリ故ニ上級ノ
裁判所ニ於テ生セル手数料又ハ立替金ト雖モ猶ホ第一審裁
判所ニ訴ヲ起サ、ル可ラス

〔參照〕

獨 第三十四條 訴訟代人附添人送達受領代人及裁判所使
吏ノ手数料及立替金ニ關スル訴訟ニ付テハ本訴訟ノ裁判

所權限ヲ有スルモノトス

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ
總テ不動産上ノ訴殊ニ本權竝ニ占有ノ訴及ヒ分
割竝ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス
地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ
之ヲ管轄ス

〔字解〕

本權トハ占有ニ對スル語ニシテ所有權ト云フノ義ナリ占有
トハ所有者ト同一ノ形狀ヲ以テ物件ヲ保有スルヲ云フ占有
ノ事ハ民法財産篇第七十九條以下ニ規定セリ

〔解義〕〔理由〕

本條ハ不動産ニ對スル訴ハ不動産所在地ノ裁判所ニ起サ、

ル可ラサルヲ示定セリ

不動産ニ付本權竝ニ占有ノ訴分割竝ニ經界ノ訴ハ不動産所
在地ノ裁判所ニ又地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所
ニ起サ、ル可ラス蓋シ不動産ニ付能ク權利ノ關係ヲ定ムル
ハ地所々在地ノ裁判所ニ若クナシトノ趣旨ニ出ツル者ナリ
不動産ノ訴ハ所在地ノ裁判所專ラニ管轄ストアルヲ以テ決
シテ當事者ノ合意ヲ以テ其管轄ヲ動ス可ラサルナリ(本法第
三十一條)

〔參照〕

獨 第二十五條 所有權物件ノ負擔又ハ其負擔ノ解除ヲ申
立ル訴訟分界訴訟分割訴訟及ヒ現有訴訟ニ付テハ不動物
件ニ關スル場合ニ限リ其物件ノ所在地ヲ管轄スル裁判所

特ニ權限ヲ有スルモノトス
地所使用權又ハ地所負擔ニ關スル訴訟ニアリテハ使用セ
ラル、地所又ハ負擔ヲ受ル地所ノ住置ニ依テ定マルモノ
トス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔
保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶
シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得
不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若ク
ハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタ
ル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

〔解義〕〔理由〕

本條ハ不動産ニ關スル特別裁判籍ヲ示定セリ

本條第一項ハ不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス
從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對ス
ル債權ノ訴ヲ起スヲ得可キコトヲ定メリ即チ負債ニ關スル
訴ハ書入質ニ關スル訴ト共ニ又辨償義務解除ノ訴ハ書入質
取消ノ訴ト共ニ又土地ニ付着シタル未濟義務ニ關スル訴ハ
其土地ノ負擔ヲ認諾セシムル訴ト共ニ不動産上ノ裁判籍ニ
訴フルヲ得ルカ如シ但其訴ノ同一被告ニ對スルキニ限レリ
又第二項ハ不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若ク
ハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ノ蒙ムリタル損害賠
償ノ訴ヲ起スヲ得ヘキコトヲ定メリ不動産所有者若クハ占
有者ニ對シ人權ヲ有スル場合ハ民法ニ於テ講究スヘキコト
ナリ

本條ヲ設クルノ趣旨タル畢竟訴求ノ便利ヲ計リタルニ在リ
不動産ニ加ヘタル損害ヲ請求スルル不動産上ノ裁判籍ニ訴
フルハ殊ニ便利ナリトス

〔參照〕

獨 第二十六條 物件上ノ裁判管轄ニ於テハ書入質上ノ訴
訟ニ負債訴訟ヲ合シ書入質消除ノ訴訟ニ身上義務ノ解除
ノ訴訟ヲ合シ地所負擔ノ認諾ノ訴訟ニ未濟供給ノ訴訟ヲ
合シテ提起スルコトヲ得但其合併シタル訴訟ヲ同一ノ被
告ニ對シ提起スルトキニ限ル

全 第二十七條 物件ノ裁判管轄ニ於テハ不動物件ノ所有
者又ハ現所有者タルノ資格ニ於テ之ニ對シ提起スル身上ノ
訴訟並ニ地所ノ損害ニ付テノ訴訟又ハ權制得有ニ付テノ

損害要償ニ關スル訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十四條 相續權遺贈其他死亡ニ因リテ効果ヲ
生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普
通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得
相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ
相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產
ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區内ニ存在ス
ルトキニ限ル

〔字解〕

遺贈トハ遺囑贈與ノ事ニシテ臨終ニ際シ某ニ死後或物件ヲ
贈與センコトヲ遺囑スルノ義ナリ又遺產債權者トハ遺產ニ對
シ債權ヲ有スルノ義ニシテ死者ニ對シ貸金ヲ爲ス等債權ヲ

有スル片ハ即チ其遺産ニ對シ債權アルモノナリ

〔解義〕

本條ハ相續權遺贈其他死亡ニ因リテ効果ヲ生スル處分ニ基
ク訴求ハ遺產者臨終ノ際住居セシ地ノ裁判所ニ起スヲ得ヘ
キコト及ヒ相續裁判籍ニ於テハ遺產ノ全部又ハ一部カ其管
轄區内ニ存在スル片ニ限リ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續
人ニ對スル訴ヲ起スヲ得ヘキコトヲ示定セリ

相續權ヲ訴争スル片遺囑贈與ニ付受贈者ト相續人トニ紛紜
アル片又相續分配ニ付相續人間ニ爭議ヲ生スル片ハ即チ死
者カ臨終ノ際有セシ普通裁判籍ノ裁判所ニ起訴スルコトヲ
得ヘシ又相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相
續人ニ對スル訴求ノ訴ヲ起スヲ得ヘシト雖モ相續ノ分配既

ニ結了スル片ハ普通裁判籍ニ從ハサル可ラス

〔參照〕

獨 第二十八條 相續權遺贈又ハ其他臨終處分ヨリ生スル
請求又ハ遺產ノ分配ニ關スル訴訟ハ遺囑者其死去ノ時普
通裁判管轄ヲ有シタル裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得
遺產ノ裁判管轄ニ於テハ遺囑者又ハ相續人タルノ資格ニ
於テ之ニ對スル請求ヨリ生スル遺產債主ノ訴訟モ亦提起
スルコトヲ得但遺產ノ全額又ハ一部其裁判所ノ管轄内ニ
存在スルトキ又ハ相續人數名アリテ未タ遺產ヲ分配セザ
ルトキニ限ル

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除ク外原告ハ數
箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕

本條ハ第二十二條ニ規定セル不動産ノ訴ヲ除クノ外原告ハ數個ノ管轄裁判所ヲ選擇シテ訴ヲ起スヲ得ヘキコトヲ示定セリ

數多ノ普通裁判管轄若クハ數多ノ特別裁判管轄相撞着シ又ハ普通裁判管轄ト特別裁判管轄ト相撞着スルニ論ナク原告ハ之ヲ撰定スルノ權アリ

〔參照〕

獨 第三十五條 原告ハ數個ノ權限ヲ有スル裁判所ノ中ニ於テ選定スルノ權アルモノトス

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ

定メタル場合ノ外尙ホ不動産上ノ裁判籍ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

〔解義〕

本條ハ管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外不動産上ノ裁判籍上ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スル片之ヲ爲シ得ヘキヲ示定セリ

管轄裁判所ノ指定ニ付申請ヲ爲ス場合及ヒ其指定ヲ爲ス裁判所ハ次條ニ於テ知ルヲ得ヘシ

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第

十條ノ規定ニ從フ

〔解義〕

構成法第十條ヲ緝閱セハ管轄裁判所ノ指定ニ付申請ヲ爲ス
場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ヲ知了シ得ヘシ

〔參考〕

裁判所構成法第十條 法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除ク外
左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ
併セテ之ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於
テ本件ヲ裁判スルノ權アルヤヲ裁判ス

第一 權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事
情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且此ノ法律第十三條
ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之

ヲ行フコトヲ得サルトキ

〔參看〕

第十三條 區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方
裁判所長ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理
ス但シ監督判事ノ職務ハ其裁判所ノ判事官等ノ順
序ニ從ヒ之ヲ代理ス

一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情
ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキ之ニ代ルヘ
キ他ノ區裁判所ハ前項ニ同シク毎年前以テ之ヲ定
ム

第二 裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲其ノ權限
ニ付疑ヲ生シタルトキ

第三 法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ
 裁判所裁判權ヲ互有スルトキ
 第四 二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ
 又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其裁判所
 ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ
 第一法律ノ理由ニ依リ裁判權ヲ行フコトヲ得サル場合ハ本
 法第三十二條ニ規定セリ又特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フ
 得サルトハ本法第百八十二條ノ場合ノ如キヲ云フナリ
 第二ハ各種ノ裁判所ノ管轄區ノ境界ニ付キ爭論ノ起リタル
 場合ニシテ例ヘハ住所ニ關スル裁判管轄ニ依リ起訴セン下
 スルニ當リ其被告ノ住宅各裁判所管轄區境界線ニ跨ル場合
 ノ如キ之ナリ

第三ハ積極的ノ裁判管轄ノ爭ニシテ第四ハ消極的ノ裁判管
 轄ノ爭ナリ

〔參照〕

獨 第三十六條 權限ヲ有スル裁判所ノ定メハ左ノ場合ニ
 於テ等級上一階上級ノ裁判所之ヲナスモノトス
 第一 當然權限ヲ有スル裁判所或ル場合ニ於テ法律上又
 ハ事實上裁判官ノ職務執行ニ故障アルトキ
 第二 各異裁判所ノ管轄ノ區劃ニ關シ訴訟ニ付テノ權限
 ナ有スル裁判所不明ナルトキ
 第三 各異ノ裁判所ニ普通裁判管轄ヲ有スル數人訴訟仲
 間トナリ普通裁判管轄ニ於テ出訴セラルヘキ場合ニシ
 テ其訴訟ニ付キ共通特別裁判管轄ノ定マラサルトキ

第四 物件上ノ裁判管轄ニ於テ訴訟ヲ提起スヘキ場合ニ於テ其物件各異ノ裁判所管轄区内ニ存在スルトキ

第五 一訴訟ニ付キ各異ノ裁判所權限ヲ有スルノ言渡ヲナシタル裁決確定シタルトキ

第六 訴訟ニ付キ各異裁判所ノ一ノミ權限ヲ有スル場合ニ於テ其各裁判所權限ヲ有セサルノ言渡ヲナシタル裁決確定シタルトキ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス
管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申

立ツルコトヲ得ス

〔解義〕

本條ハ一讀明瞭ニシテ別ニ解釋ヲ要セス申請ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ハ前條ノ解義ニ依テ自ラ知了セラルヘシ

〔理由〕

申請ヲ決定スルニ口頭辯論ヲ須ヒス又決定ニ對シ上訴ヲ許サ、ル所以ノモノハ一ノ請願ヲ處分スルマテニシテ決シテ訴訟ヲ裁決スルニ非ラサレハナリ

〔參照〕

獨 第三十七條 權限ヲ有スル裁判所ヲ定ル爲メノ申立ニ付テノ裁決ハ豫メ口頭上ノ審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得

權限ヲ有スル裁判所ヲ定ル決議ニ對スル不服ハ之ヲ申立ルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ効力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス

第一 財産權上ノ請求ニ非ラサル訴訟ニ係ルトキ

第二 專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

〔解義〕

第二十九條ハ訴訟人ノ合意ヲ以テ事物上若クハ土地上ノ管轄ニアラサル第一審裁判所ヲ管轄裁判所ト爲スヲ得ヘキヲ第三十條ハ被告カ暗黙ニ依リ管轄ヲ承認セル場合第三十一條ハ訴訟人ノ合意ヲ以テ管轄ヲ定ムヘカラサル場合ヲ示定セリ

第二十九條

第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ依リ管轄權ヲ有スルコトヲ得ヘシ故ニ價額百圓ヲ超過スル片

區裁判所へ訴フルモ又百圓ヲ超過セサルル地方裁判所ニ訴フルモ(事物上ノ管轄尙ホ甲地ノ區裁判所若クハ地方裁判所ニ訴フ可キヲ乙地ノ區裁判所若クハ地方裁判所へ訴フルモ(土地上ノ管轄)當事者双方ノ隨意ナリトス
 當事者ノ合意ニ因リ管轄ヲ定ムルハ第一審裁判所ニ限レリ故ニ之レヨリ上級ナル裁判所ハ雙方ノ合意ヲ以テ管轄權ヲ變更ス可カラサルナリ
 又當事者ノ合意ハ書面ニ依テ分明ナラシメサル可ラス尙ホ當事者ノ合意ハ例エハ一定ノ會社ノ關係又ハ一定ノ保僉契約ノ如ク權利ノ關係一定シ且其權利關係ヨリ生スル訴ニ係ルルニ限り有効ナリ若シ萬般ノ權利關係ニ係ルルハ裁判所ハ管轄違ノ宣告ヲ爲スヘキナリ

第三十條

被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辨論ヲ爲スルハ仮令ヒ非管轄裁判所ナルモ第一審裁判所ハ前ト同シク管轄權ヲ有ス此時ハ被告カ暗黙ニ之ヲ認諾セリト看做スモノナリ然レモ若シ被告カ初ヨリ缺席セシルハ決シテ之ヲ默諾セシモノト看做ス能ハサルナリ

第三十一條

以上當事者ノ合意ニ因リ管轄ヲ定ムルヲ得ヘシト雖モ若シ其訴訟ニシテ財産權上ノ請求ニ係ラサルトキ又ハ其訴訟ニシテ專屬管轄ニ屬スルルハ決シテ之ヲ許サ、ルナリ財産權上ノ請求ニ係ラサルトキトハ婚姻ニ關スル訴其他身分上ニ關スル訴ノ如キヲ云ヒ又專屬管轄トハ不動産ニ係ル訴訟ニ

シテ本法第二十二條ニ定ムル如キヲ云フ

〔分析〕

合意ノ管轄ニ付其要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 第一審裁判所ノ管轄權ナラサル可ラス

第二 當事者ノ合意ハ書面ニ依リ分明ナラシムルカ又ハ
被告カ口頭辨論ヲ始ムル前異議ヲ申立サルカナ要
ス

第三 一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ナ
ラサル可ラス

第四 訴訟カ必ス財産權上ニ係リ且管轄カ專屬ナラサル
ヲ要ス

〔理由〕

管轄ノ合意ヲ許シタルハ元ト訴訟ノ眼目トスル所原被告ノ
便益ヲ計リ且法權保護ノ周到ニシテ迅速ナルヲ期スルニ在
リ又管轄ノ合意ヲ一定ノ權利關係財産權上ノ請求及ヒ管轄
ノ專屬以外ニ制限シタルハ公然ノ秩序ヲ保護スル爲メ特ニ
法律ヲ以テ定メタルヲ濫ニ變更セシメサランカ爲メナリ

〔參照〕

獨 第三十八條 當然權限ヲ有セサル始審裁判所ハ原被告
雙方ノ明約又ハ默約ニ依リ權限ヲ有スルモノトス

全 第三十九條 默約ト看做スヘキハ被告權限違ヲ申立ル
コトナクシテ本事件ノ口頭上審問ヲ受ケタルトキナリト
ス

全 第四十條 契約ハ一定ノ權利上關係及其關係ヨリ生ス

ル訴訟ニ關セサルトキハ法律上効力ヲ有セサルモノトス
契約ハ其訴訟財産權上ヨリ他ノ請求ニ關スルトキ又ハ其
訴訟ニ付キ特別裁判管轄ノ定マリタルトキハ之ヲ許サ、
ルモノトス

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其

職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

- 第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルト
キ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方
若クハ雙方ト共同權利者共同義務者若クハ
償還義務者タル關係ヲ有スルトキ
- 第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙

方又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付
テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑
定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ訴訟代
理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルト
キ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルト
キ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ
仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシ
テ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受
命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨ
リ除斥セラル、コト無シ

〔字解〕

除斥トハ判事カ或ル原因ニ依リ訴訟事件ニ付テノ職務執行ヨリ擯斥セラル、チ云ヒ又忌避トハ除斥ト同一ノ原因及ヒ偏頗ノ恐レアルトキ當事者ヨリ判事ノ掛リ替チ求ムルヲ云フ受命判事トハ下調ノ爲メ特ニ裁判所ヨリ命チ受ケタル判事チ云ヒ又受託判事トハ他廳ヨリ或取調ノ囑託チ受ケタル判事チ云フ

〔解義〕〔理由〕

本條ハ判事カ職務ヨリ除斥セラル、場合チ示定セリ除斥ハ原被告ノ忌避スルト否トニ關セス法律ノ力ニ依テ命スルモノナルチ以テ敢テ訴訟經過ノ時期如何ニ依ルチ要セサルナリ法律上除斥ス可キ判事ノ參與シタル判決ニ對シテ

ハ上訴チ爲シ又ハ再審チ求ムルコトヲ得ヘシ而シテ忌避ハ原被告ノ有スル權利ニシテ即チ判事ニ偏頗ノ恐レアルトキ之ヲ行フコトヲ得ヘキモノナレハ自ラ其權利チ擲棄シ其審判ニ就クコトヲ得ヘシ故ニ忌避ハ一定ノ時期ニ於テセサルトハ遂ニ申立ノ効チ失フニ至ルヘシ裁判官適當ノ時ニ回避シ又原被告ノ忌避チ認可シタルニ拘ラス其訴訟ニ參與シタルトハ亦其判決ニ對シ不服チ訴フルコトヲ得ヘキナリ

本條ハ除斥ノ原因數個ヲ舉示セリ

第一ハ裁判官自ラ關係チ有スル案件ニ付テハ之チ裁判セシメストノ原則ニ依レルモノナリ判事カ原被告ナルト又訴訟ニ係ル請求ニ付當事者ト共同權利者共同義務者若クハ當事者ニ對シ償還義務者ナルトハ即チ裁判官自ラ關係チ有スル

訴訟ナルヲ以テ其職務ヨリ除斥セラルヘキナリ而シテ主參加人若クハ補助參加人トナルルモ亦訴訟ノ當事者ナルヲ以テ第一中ニ包含スヘシ又判事ノ婦カ之レト同一ナル關係アルルニ於テモ猶ホ判事ニ關係アルヲ以テ除斥セラルヘキナリ第二ハ判事又ハ其婦カ當事者又ハ其配偶者ト親族ナルルニシテ此時ハ姻族ノ關係アリテ假令ヒ婚姻ノ解ケタルルモ猶ホ除斥セラルヘキトス而シテ何人ヲ以テ親族ト爲スカハ民法ニ規定スヘキコトナレモ現今ハ刑法第百十四條ニ規定セルヲ以テ之ニ依準セザル可ラス第三ハ判事カ同一事件ニ付證人鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルル若クハ受ケタルルモ又訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルルモ又法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルト

キ若クハ有シタルルモニシテ自カテ訴訟ニ關係ヲ有スルヲ以テ職務ヨリ除斥セラル可シ而シテ證人鑑定人及ヒ訴訟代理人法律上代理人ノコトハ後條ニ規定セリ第四ハ判事カ前審又ハ仲裁ニ於テ干與シタル裁判ニ對シ當事者ヨリ不服ヲ唱へ上訴シタル場合ナリ例ヘハ他方裁判所判事カ上級裁判所ニ轉任セシニ前ニ地方裁判所ニ於テ躬ヲ干與シタル裁判ニ對シ上訴ヲ提起シ來レリ此時判事ハ其職務ヨリ除斥セラルヘキナリ但受命判事又ハ受託判事トシテ下調ヲ爲スニハ假令前ニ審判又ハ仲裁ニ干與セシト雖モ除斥セラルヘキナシ何トナレハ受命判事受託判事ハ本案ニ付判決ヲ爲スニアテサレハナリ

〔參照〕

獨 第四十一條 裁判官ハ左ノ場合ニ於テ其職務執行ヲ法律上禁止セラル、モノトス

第一 裁判官自己ニ原被告一方トナル事件又ハ一方ト共同權利者共同義務者又ハ償還義務者ノ關係ヲ有スル事件ナルトキ

第二 婚姻ノ存否ヲ問ハス裁判官ノ婦ノ事件ナルトキ

第三 裁判官ト直系ノ血族姻族又ハ養子ノ關係アル人又ハ三度ニ至ル傍系ノ血族又ハ二度ニ至ル姻族ノ關係アル人ノ事件ナルトキ但姻族ノ關係ヲ生シタル婚姻ヲ解キタルトキモ亦同シ

第四 裁判官原被告一方ノ訴訟代人又ハ附添人トシテ任セラレ又ハ任セラレタリシ事件又ハ一方ノ法律上

代人トシテ出延スルノ權ヲ有シ又ハ有シタリシ事件ナルトキ

第五 裁判官證人又ハ鑑定人トナリテ尋問ヲ受ケタル事件ナルトキ

第六 裁判官前裁判又ハ仲裁裁判手續ニ於テ不服ヲ受ケタル裁決言渡ノ際參與シタル事件ナルトキ但受命裁判官又ハ受託裁判官ノ行務ニ關スルトキハ此限ニアラス

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得「偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコト

ヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕

本條ハ忌避ノ事ニ付示定セリ
前條ニ掲クル事由ニ依リ判事カ職務執行ヨリ除斥セラル、
并又判事ニ偏頗ノ恐アル并ハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨ
リ掛判事ヲ忌避シ其掛替ヘテ求ムルコトヲ得ヘシ
判事カ職務執行ヨリ除斥セラル、場合ハ法律ニ於テ之ヲ豫
定セルヲ以テ其以外ノ事由ニ涉リ之ヲ除斥スル能ハスト雖
モ若シ其事由ニシテ偏頗ノ恐アリトスルニ足ル并ハ訴訟人
ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得ヘシ判事モ亦是等ノ事由アル并
其訴訟ヲ回避シ得ヘキコトハ後條ニ規定セリ

偏頗ノ恐アル并ハ總テノ場合ニ於テ忌避スルコトヲ得ルト
アリ故ニ苟モ偏頗ノ恐アリトスルニ足ル并ハ前條ノ除斥ト
異リ其事由ノ如何ヲ問ハス總テ之ヲ忌避スルコトヲ得ヘキ
ナリ

本條ハ偏頗ノ忌避ニ付之カ解義ヲ掲ケリ即チ判事カ不公平
ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アル并ハ之カ偏
頗ノ恐アリトスルコトヲ得ヘシ

不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトハ
例ヘハ裁判官其訴訟事件ニ付意見ヲ泄シ若クハ忠告シ又ハ
原被告ノ一方ニ親密ナル交際アルカ若クハ讐敵ナルカ又ハ
證人若クハ鑑定人ト指名セラレタルトキノ如シ
右偏頗ニ付故ヲ解義ヲ掲クル所以ノモノハ當事者ヨリ些末

ナ事由トシ濫ニ忌避スルノ弊ヲ防クニ在リ

〔參照〕

獨 第四十二條 裁判官其職務執行ヲ法律上禁止セラレタル場合並ニ偏頗ノ恐レアルトキハ之ヲ忌避スルコトヲ得ルモノトス

偏頗ノ恐レアル爲メノ忌避ハ裁判官ノ公平ニ對スル嫌疑ヲ辨明スルニ適切ナル理由アルトキ之ヲナスコトヲ得忌避權ハ各個ノ場合ニ於テ原被告雙方ニ屬スルモノトス

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺

知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

〔解義〕

本條ハ忌避ニ付申立ノ時期ヲ示定セリ

判事カ除斥セラル、場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得ヘシ又偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ本案ノ口頭辨論ニ立入ル前之カ申立ヲ爲サ、ル可ラス故ニ若シ判事ノ面前ニ於テ本案ノ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ答辨シタル後ハ最早之カ申立ヲ爲スヲ得サルナリ但原被告カ申立ヲ爲ス當時忌避ノ原因アルヲ知ラサル片ハ格別ナリトス

除斥セラル、場合ニ於テノ忌避ト偏頗ノ恐アル場合ニ於テノ忌避ト如此差異ヲ設ケタルノ理由ハ第三十二條ノ解義ニ詳悉セリ

〔辨疑〕

判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ仮令ヒ辨論ヲ終結シタルモ未タ判決ヲ受ケサル以前ナレハ猶ホ之ヲ爲シ得ヘキヤ如何曰ク然リ判決ヲ受ケサル以前ニ在テハ未タ訴訟ハ落着セサルヲ以テ本條如何ナル程度ニ在ルヲ問ハストアルニ包含スルモノナリ若シ程度ノ文字ヲ狹隘ニ解釋シ辨論終結以前ニ限ルトスルキハ其取調ノ無効ニ歸スルヲ知了シナカラ之カ判決ヲ與ヘサル可ラサルニ至ル豈ニ如此ノ律意ナランヤ故ニ辨論終結後判

決以前ニ於テ職員ノ除斥セラル、事由ヲ發見スル片ハ更ニ適當ノ取調ヲ爲サ、ル可ラサルナリ

〔參照〕

獨 第四十三條 原被告其知了シタル忌避ノ理由ヲ申立ルコトナクシテ審問ニ就キ又ハ申立チナシタルトキハ偏頗ノ恐レアルカ爲メ裁判官ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書

面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其疏明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立チ爲シ

又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判
事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因其
後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ疏明
ス可シ

〔解義〕

本條以下第四十條マテハ忌避ノ手續ヲ示定セリ
忌避ノ申請ハ忌避セント欲スル判事ノ所屬セル裁判所ニ爲
サ、ル可ラス而シテ申請ハ書面ヲ以テスルモ又ハ口頭ヲ以テ
申立書記ヲシテ調書ヲ錄取セシムルモ自由ナリトス
忌避ノ原因ハ之ヲ疏明セサル可ラス故ニ判事カ法律ニ依リ
職務執行ヨリ除斥セラル、場合ニ於テノ忌避ナレハ本法第
三十二條ニ列記セル事由ヲ疏明ス可シ又偏頗ノ恐アル場合

ニ於テノ忌避ナレハ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足
ルヘキ事情ヲ疏明セサル可ラス而シテ之ヲ疏明スルニハ本
法第二百二十條ニ定ムル一般ノ規則ヲ適用スルコトヲ得ヘ
シ又之ヲ疏明スルニハ初メ提出セシ書面ニ於テスルカ口頭
ヲ以テスルルハ其當時ニ申立ツルヲ通常トス又判事ノ職務
上ノ陳述ニシテ忌避ノ事由ト爲スニ足ルルハ探テ以テ疏明
ノ用ニ充ツルコトヲ得ヘシ

原被告カ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ答辨セシ後チ
偏頗ノ忌避ヲ爲スルハ原因ノ其後ニ生シタルカ又ハ原因ア
ルコトヲ後ニ覺知セシカヲ證明セサル可ラス何トナレハ申立
チ爲ス當時其原因アルコトヲ覺知セルルハ自ラ權利ヲ拋棄ス
ルモノト見做シ之カ忌避ヲ許サ、レハナリ

〔參照〕

獨 第四十四條忌避ノ申立ハ裁判官所屬ノ裁判所ニ之ヲナスヘキモノトス又其申立ハ裁判所書記ニ口述シテ筆記セシムルコトヲ得

忌避ノ理由ハ之ヲ證明スヘキモノトス宣誓ハ其證明ノ爲メ之ヲ用ルコトヲ許サス忌避セラレタル裁判官ノ證言ハ其證明ノ爲メ之ヲ引用スルコトヲ得

忌避セラレタル裁判官ハ忌避ノ理由ニ付職務上陳述ヲナスヘキモノトス

原被告裁判官ノ審問ニ就キ又ハ之ニ申立ヲナシタル場合ニ於テ偏頗ノ恐れアルカ爲メ其裁判官ヲ忌避スルトキハ後日始メテ其忌避ノ理由ノ生シ又ハ原被告ノ之ヲ知了シ

タルコトヲ證明スヘキモノトス

第三十六條

忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬

スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得ス
若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ忌避ノ申請ヲ裁判スルコトニ付示定セリ

忌避セラレタル判事カ合議裁判所即チ地方裁判所以上ノ裁判所ニ屬スルルハ其裁判所定員ノ判事ヲ以テ之ヲ裁判セシム而シテ忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ干與スルコトヲ得ス若シ忌避セラレタル判事ヲ除キ他ノ判事ニテ定數ノ人員ニ充タサルルハ直近上級ノ裁判所之ヲ裁判ス即チ地方裁判所ニ對シテハ控訴院控訴院ニ對シテハ大審院之ヲ裁判ス而シテ判事ノ定數ニ充タサル場合ニ於テ之ヲ上級裁判所ニ移送スルハ何人カ其任ニ當ル可キカニ付規定セスト雖此時ハ其裁判所ヨリ上級裁判所ニ移送セサル可ラス何トナレハ判事ノ定數ニ充タサルトテ之ヲ却下スル能ハサレハナリ
 區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所之ヲ裁判ス故ニ區裁判所ハ其申請ヲ地方裁判所ニ送致セサル可

ラス然レバ區裁判所判事ニシテ其申請ヲ正當ナリトスルルハ最早地方裁判所ニ於テ裁判スルノ必要ナク隨テ申請ヲ送致スルヲ要セサルナリ區裁判所判事ノ忌避セラレタルルル上級ノ地方裁判所ニ於テ裁判スル所以ノモノハ區裁判所ハ單獨判事ニシテ合議制ニアラサルヲ以テ判事ニ對シ忌避スルルルハ即チ區裁判所ヲ忌避スル者ト爲セハナリ且之ヲ裁判スルルモ全一權力アル他ノ單獨判事ニテ爲サル可ラサレハナリ

〔參照〕

獨 第四十五條 忌避ノ申立ニ付テハ忌避セラレタル者ノ所屬裁判所之ヲ裁決シ其裁判所忌避セラレタル職員ノ退去スルカ爲メ議決スルコト能ハサルトキハ等級上一階上級ノ裁判所之ヲ裁決スルモノトス

區裁判官忌避セラレハトキハ地方裁判所之ヲ裁決スルモ
ノトス區裁判官忌避ノ申立ヲ理由アリトスルトキハ裁決
ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論
ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判
事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可
シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決
定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請ヲ不
當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲
スコトヲ得

〔解義〕

本兩條忌避申立ノ審理及ヒ上訴ニ付示定セリ
第三十七條

忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ須ヒスシテ裁判所ノ
會議室ニ於テ之ヲ爲スモノトス而シテ忌避セラレタル判事ハ
其判決以前ニ當リ己ノ意見書ヲ提出セサル可ラス裁判所ハ
即チ申請書及ヒ意見書ニ依リ決定スヘキモノナリ

第三十八條

裁判所ニ於テ忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣告シ他ノ判事ヲ
交任セシムルハ申請者ニ於テ最早満足シ又相手人ニ於テ
モ交任セラレタル裁判官ノ審理ヲ受クルモ固ヨリ差等アル
ノ理ナキヲ以テ孰レモ之ニ對シ上訴スルヲ得サルナリ然レ
モ其申請ヲ不當ナリト宣告スルハ大ニ利害ニ關係アルヲ

以テ之カ上訴ヲ許セリ而シテ即時抗告ニ限り之ヲ爲スコトヲ許シタルハ是レ迅速ニ訴訟ノ落着センヲ希望スルニ出ツルモノナリ

〔參照〕

獨 第四十六條 忌避ノ申立ニ付テノ裁決ハ豫メ口頭上審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得

其申立テ理由アリトシテ言渡ス決議ニ對シテハ上訴ヲナスコトヲ得ス其申立テ理由ナシトシテ言渡ス決議ニ對シテハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得

全 第四十四條第三項 忌避セラレタル裁判官ハ忌避ノ理由ニ付職務上陳述ヲナスヘキモノトス

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完

結スルマテ總テノ行爲ヲ避ク可シ然レトモ偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス可シ

〔解義〕〔理由〕

本條ハ忌避セラレタル判事ノ行爲ニ付示定セリ判事ニシテ忌避セラレタルルルハ其申請ニ對スル裁判ノ完結スルマテ總テノ行爲即チ審理其他一切ノ處分ヲ停止セサル可ラス而シテ偏頗ノ事由ヲ以テ忌避セラレタルルルハ其行爲ニシテ猶豫ス可ラサルモノニ限り之ヲ爲スコトヲ得ヘシ故ニ法律上職務執行ヨリ除斥セラル、場合ニ於ケル忌避ニ至テハ其裁判ノ決着スルマテ如何ナル行爲ト雖レ之ヲ停止セサル可ラサルナリ抑法律上職務執行ヨリ除斥セラル、場合ハ

仮令當事者ノ申請ナキモ法律ノ力ニ依リ當然其執行ヲ禁止セラル、ナ以テ此場合ニ於ケル忌避ニ付テハ總テノ行爲ヲ爲ス能ハサル固ヨリ當然ナリト雖片偏頗ノ忌避ニ至テハ或ハ其申立ノ不相當ニシテ屢々訴訟ノ澁滯ヲ來シ對手人ニ損害ヲ被ラセ易キノ弊アルヲ以テ法律ハ特ニ此場合ニ限り猶豫ス可ラサル行爲ノミ之ヲ爲スヲ得ルト定メタリ而シテ其行爲ノ猶豫ス可ラサルト否ニ至テハ偏ニ裁判官ノ斟酌ニ任サ、ル可ラサルナリ

〔參照〕

獨 第四十七條 忌避セラレタル裁判官ハ忌避申立ノ終結前ハ遅延ス可ラサル處分ニアラサレハ之ヲナスコトヲ得ス

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セラレル疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要セス

〔解義〕

本條ハ判事カ職權上忌避シ得ヘキ事ヲ示定セリ 忌避申請ノ管轄裁判所ハ仮令當事者ノ申請アラサルモ掛判事ヨリ若クハ同僚判事ヨリ忌避ノ原因タル事情アリトシテ即チ偏頗ノ嫌疑トシテ忌避セラル、ニ相當ナルヘシトテ申立ヲ爲ス片ハ相當ノ裁判ヲ爲サ、ル可ラサルナリ若シ其申

立ニシテ相當ナリトスルハ速ニ掛替テ命シ又忌避ノ原因
ナシトスルハ之カ回避ヲ許サ、ル可シ猶ホ判事カ法律ニ
依リ除斥セラル、疑アルハモ裁判ヲ爲サ、ル可ラサルナリ
他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セラル、疑アルハ
トアリ故ニ第三十二條ニ掲グル法律ニ依リ職務ヲ停止セラ
ル、コトノ顯然ナル場合ヲ云爾セルニアラサルハ明カナリ
何トナレハ若シ法律ニ依リ職務ヲ停止セラル、コトノ顯然
ナル時ハ法律上直ニ回避セサル可ラサレハナリ因テ除斥セ
ラル、ノ事由アリヤ否ニ付疑ノ存セル場合ト解釋セサル可
ラス

〔參照〕

獨 第四十八條 忌避申立ヲ終結スルノ權アル裁判所ハ其

申立ナキモ裁判官其忌避ノ理由トナルヘキ狀況ノ申立ヲ
ナストキ又ハ他ノ事由ニ依リ裁判官法律上職務執行ヲ禁
止セラレタルヤニ付キ疑ヲ生スルトキ亦其裁決ヲナスヘ
キモノトス

其裁決ハ豫メ原被告雙方ヲ尋問スルコトナクシテ之ヲナ
スモノトス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準
用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

〔解義〕

本節除斥及ヒ忌避ニ付テノ諸規則ハ裁判所書記ニモ適用ス
ヘキコトヲ示定セリ

裁判所書記ハ調書ヲ作ル等頗ル重要ナル職務ニ在ルヲ以テ

特ニ本條ヲ設ケテ判事ト同一ノ決定ニ及ヒタルモノナリ

〔参照〕

獨 第四十九條 此節ノ規定ハ裁判所書記ニモ亦又之ヲ適

用スルモノトス其裁決ハ裁判所書記ノ附屬スル裁判所之

チナス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル

爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

第一 公ノ法人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ

分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル

訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲
ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付
キ陳述ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕〔理由〕

本條ハ檢事カ訴訟ニ立會フ可キ場合ヲ示定セリ
 檢事ハ裁判所職員ノ一ニシテ專ラ刑事ノ公訴ヲ起シ其取扱
 上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及ヒ其
 判決ノ適當ニ執行セラル、ヤチ監視スルニ在リト雖モ檢事
 ノ制タル元ト社會ノ目代トナリ公益ヲ保護スルニ淵源スル
 ナ以テ民事ノ訴訟ニテモ公安ニ關係セルルハ之ニ立會ヒ相
 當ノ意見ヲ陳述セサル可ラス是レ特ニ本條ノ設ケアル所以
 ナリ本條ハ檢事ノ義務トシテ立會ハサル可ラサルモノニシ
 テ訴訟ノ公安ニ關スル數個ノ場合ヲ列記セリ

第一 公ノ法人ニ關スル訴
 公ノ法人ニ付テハ本法第十四條ニ於テ解義セル如ク國縣郡
 村等ノ無形人ヲ云フモノニシテ之ニ對スル訴訟ハ或ハ安寧

秩序ニ關スルアリ或ハ社會ノ公益ニ關スルアリテ最モ檢事
 ノ立會ヲ必要トスルモノナリ

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル
 訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧蝕ノ遺産ニ關スル訴訟

婚姻ノ無効ヲ爭ヘルカ如キ夫婦間ノ財産ニ關シ雙方爭アル
 カ如キ一方父ナリト云ヒ一方父ニアラスト爭ヒ若クハ養親
 子ノ關係ノ有無ニ付爭アルカ如キ無能力者即チ幼者禁治產

者ニ關スル争ノ如キ養料ヲ給與スル義務ノ有無ニ付争アル
カ如キ失踪者又ハ相續人ナキ遺留財産ニ對シ争ヲ生スルカ
如キハ孰レモ公安ニ關係セサルハナシ是等ノ事ハ各國大抵
民法中ニ規定セリト雖モ個ハ民法中ノ公法ト稱スヘキモノ
ニノ決シテ他純然タル私契約ト同視スルヲ得サルモノナリ

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

證書ノ偽造或ハ變造ニ關スル訴訟ニ至テハ果シテ刑事上ノ
犯罪アルモ知ル可ラス又再審ハ確定判決ヲ平翻センコトノ哀
訴ニシテ而シテ法律ノ再審ヲ許セル場合ハ專ラ刑事ノ犯罪
ニ關セルコト多シ是レ檢事ノ立會ヲ必要トスル所以ナリ
以上ノ場合ニ於テハ檢事ハ必ス口頭辯論ニ立會ヒ相當ノ意

見テ陳述セサル可ラス而シテ此等ノ訴訟ニ立會フハ主トシ
テ法律上保護ヲ受クヘキ者ノ爲メナリト雖トモ其是非ニ拘
ラス何時モ其者ニ利益トナル可キ意見ヲ陳述セサル可ラサ
ルノ責ナシ故ニ之カ返對ノ意見ヲモ陳述スルコトヲ得ヘキ
ナリ

檢事ハ右等ノ訴訟ニ立會フト雖モ決シテ訴訟人ニアラサル
ヲ以テ刑事ノ公訴ト異リ當事者ノ辯論中ニ意見ヲ陳述スル
ヲ得ス必ス當事者ノ辯論終リタル後ニ於テセサル可ラサル
ナリ又當事者モ檢事ノ意見ニ對シ反駁辯論ヲ試ム可ラス只
檢事ノ陳述ニシテ事實ヲ誤解セルト之ヲ更正スルコトヲ得
ヘキノミ

本條ハ檢事ニ訴訟ヲ通知スルノ規定ナキヲ以テ檢事ハ何ニ

依テ其訴訟ノ有無ヲ知ルコトヲ得ヘキヤノ疑ナキニアラス
ト雖ル檢事ハ元ト同一裁判所内ニ在ルヲ以テ右訴訟アル毎
ニ裁判所ヨリ之ヲ通知セシムルノ律意タル明カナリ
此他本法中檢事ノ關係スル場合ニアリ本法第百一條及ヒ第
三百五十四條ニ定ムルモノ之ナリ

本條ハ檢事ノ必ス立會ヲ要スヘキ場合ヲ規定セリ若シ本條
以外ノ訴訟ニシテ公益世安ニ關係スル并例ヘハ贈與ニ關ス
ル訴訟相續分配ニ關スル訴訟ノ如キ立會ヲ必要ト認ムヘキ
并ハ檢事ハ其通知ヲ求メ意見ヲ述フルコトヲ得ヘキナリ
〔參考〕

構成法第六條 各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付
公訴ヲ起シ其取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル

適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラル、ヤチ監視シ又
民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其意見
ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行
政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上其ノ職權ニ關スル
監督事務ヲ行フ

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又
ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ト法律
上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト法律上
代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ
付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

〔字解〕

法律上代理人トハ法律上常ニ無能力者ヲ代表スル者ヲ云フ
幼者ニ於ケル父若クハ後見人婦ニ於ケル夫無形人タル社團
ニ於ケル管理人ノ如キ是ナリ

〔解義〕

本節ハ當事者ノ訴訟能力ニ關シ示定セリ
原告若クハ被告トナリ自ラ訴訟ヲ爲ス能力ノ代理人ナシ
テ訴訟ヲ爲サシムル能力ノ代理人訴訟無能力者カ法律上代理人
ニ代表セラル、及ヒ法律上代理人訴訟ヲ爲スニ付特別委
任ヲ要スル場合ノ民法ノ規定ニ從ハサル可ラス而シテ
以上ノ能力ニ付テハ他日發布セラル、民法人事篇ニ依テ決
定ス可キコトナリ

抑モ自行自治ノ能力ヲ有スルモノハ隨テ訴訟能力ヲ有スル
コト明ナリ而シテ自行自治ノ能力ヲ有スルモノハ果シテ如
何ナル人ナル乎ニ至テハ民法ノ規定ヲ俟テ始テ知ル可シト
雖モ概子左ニ掲クル者ハ訴訟能力ナキモノトス
智識ヲ具備セサル者例ヘハ小兒、精神病者ノ類
智識ヲ具備スルモ自治ノ權ヲ有セス又ハ制限セル自治ヲ有
セル者例ヘハ未丁年者、浪費者、既脱後見幼者ノ類
又無形人タル社團、財團ハ原被告トナリ得ルモ自ラ訴訟スル
ノ能力ナシ
法律上代理人カ訴訟ヲ爲スニ付特別委任ヲ必要トスル場合
ハ民法人事篇ニ規定スヘキコトニシテ後見人カ或場合ニ於
テ裁判所ノ認可ヲ受クルカ如キヲ云フ

〔參照〕

獨 第五十條 原被告ノ裁判所ニ出ルノ能力及訴訟能力ヲ有セサル原被告ノ爲メ他人ヲ以テスル代理法律上代人並ニ訴訟ヲナス爲メ特別委任ノ必要ハ民法ニ從テ之ヲ定ムルモノトス但後數條ニ於テ之ニ違フ規定ヲ掲クル場合ハ此限ニアラス

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

〔解義〕

本條ハ一讀明瞭ニシテ解釋ヲ要セス
本條ノ趣旨ニ依テ推考スルハ若シ外國人自國ノ法律ニ於

テ訴訟能力ヲ有スルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ナキハ猶ホ訴訟無能力者ト看做ス可キハ自ラ明ナリ

〔參照〕

獨 第五十三條 自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ナキ外國人訴訟裁判所ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルトキハ之ヲ其能力アルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス職權ヲ以テ訴訟能力法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ
裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルトキハ

原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲナスコトヲ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

〔解義〕〔理由〕〔前例〕

本條ハ訴訟能力代理資格委任缺乏ニ付調査ス可キ事ヲ示定セリ

本條第一項ハ訴訟能力ノ完否法律上代理人タル資格ノ適否及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル委任ノ有無ニ付裁判所ハ職權ヲ以テ調査ス可キコトヲ定メリ

訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハストアリ故ニ訴訟ノ結局ニ至ル間何時ニテモ之ヲ發見スル片ハ調査セサル可ラサルナリ何トナレハ若シ是等ノ不完備アル片ハ訴訟ハ遂ニ無効ニ歸スレハナリ又一方カ是等ノ不完備ニ付抗辨スル片ハ必ズ終局判決前ニ於テ他ノ妨訴抗辨ト共ニ中間判決ヲ爲サ、ル可ラサルナリ尙ホ訴訟ノ進行中原被告訴訟能力ヲ失ヒ或ハ法律上代理人死亡シ若クハ代理權ノ期滿ニ至ル片ハ本法第百八十條ニ依リ訴訟ハ中斷セラル可キナリ此他本法中本條ニ參看スヘキ法條ハ第百十二條第百六條第百五十二條ナリトス

第二項ハ訴訟ノ遅延ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリテ且其欠缺ヲ補正シ得ヘキ片ハ裁判所ハ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條

件ヲ以テ訴訟ヲ繼續スルヲ得ヘキコトヲ定メリ尙ホ此場合ニ於テハ補正ノ爲メ與ヘタル一定ノ期限ヲ經過スルニ非ラサレハ之カ言渡ヲ爲ス可ラストナセリ

訴訟遅延ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリトハ例ヘハ立證方法ノ確定假差押假處分ノ實行時効ノ中斷猶豫期限ノ經過等ニ付其利害ノ最モ時間ニ關係スル場合ヲ云フ
欠缺スル所アルモ一旦訴訟ノ繼續ヲ許サレタル上ハ訴訟資格アル者ノ爲シタルト同一ノ効力アリトス然レモ一定ノ時期内ニ補正セスシテ期間ヲ經過スルハ以前ニ溯リ渾テノ行爲ヲ無効トナスモノナリ此時ハ補正セサル訴訟人ハ出廷セサルモノト看做シ欠席判決ヲ受ク可キナリ
一定期間ノ滿了後ハ何時ニテモ裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシト雖

凡若シ未タ裁判ヲ與ヘサル時ハ最終ノ口頭辨論マテハ欠缺ヲ追完スルコトヲ得ヘキナリ

〔参照〕

獨 第五十四條 裁判所ハ職權ヲ以テ訴訟能力法律上代人ノ資格及訴訟ヲナス爲メ必要ナル委任ノ缺乏ナキヤニ注意スヘキモノトス

原被告又ハ其法律上代人ニハ原被告ノ爲メ遅延ノ恐レアルトキ其缺乏ヲ補フノ制限ヲ以テ訴訟ヲナスコトヲ許ス
ヲ得終局判決ハ其缺乏ヲ補フ爲メ定ムヘキ期限ノ經過シタル後始メテ之ヲ言渡スコトヲ許スモノトス

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴ヲ起ス可キ場

合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ
繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滯ノ
爲ニ危害ノ恐アル場合ニ限リ特別代理人ヲ任ス
可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ
申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ
其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可
シ
申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコト
ヲ得
裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代

理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付キ
法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟
無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫
所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律上
代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滯ノ爲メ危害ナ
シト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スル
コトヲ得此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク
外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

〔解義〕

第四十六條及ヒ第四十七條ハ訴訟上管理人ヲ任命ス可キ場
合ヲ示定セリ

第四十六條

訴訟無能力者ニシテ法律上代理人ノ全クアラサルハ又ハ相續人ノ定マラサル遺産又ハ分明ナラサル相續人ニシテ同シク法律上代理人アラサルハ是等ノ者ニ對シテ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ其事件ヲ管轄ス可キ裁判所ノ裁判長ハ其事件ノ情狀ヲ細察シ若シ法律上代理人ナキカ爲メ訴訟ヲ遅延シ爲ニ危害ヲ生スルノ恐アルハ例ヘハ貸金ヲ請求スル原告カ切迫ノ場合ニ陥リタル時ニ於テ見ル所ノ被害ノ如シ特別代理人ヲ任セサル可ラサルナリ

特別代理人ノ任命ニ付テノ申請ハ書面ニテモ又口頭ヲ以テモ之ヲ爲スヲ得ヘシ而シテ裁判所ハ口頭辨論ヲ須ヒス直ニ會議室ニ於テ決定シ其裁判ヲ申請人ニ送達シ又申請ヲ認許

シタルハ特別代理人ニモ該裁判ヲ送達スヘキモノトス

申請ヲ認許セシハ固ヨリ異議ノ容ルヘキナキモ若シ申請ヲ却下サレタルハ申請人ハ其裁判ニ對シ抗告ヲ爲スヲ得可シ而シテ抗告ノミニ限り之ヲ許シタルハ未タ本訴訟ニアラサルト又迅速ニ落着センヲ希望スルニアリ抗告ノ手續等ハ本法第四百五十五條以下ニ規定セリ

裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付法律上代理人ト同一ナル權利義務ヲ有スルモノトス

裁判所ノ裁判長トアリ故ニ本條ハ合議裁判所ニノミ適當ス何トオレハ區裁判所ハ單獨制ニシテ裁判長アラサレハナリ

第四十七條

又本法第十五條ニ掲クル場合ニ於テ訴訟無能力者カ現在地
又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ於テ訴ヲ受ク可キ
ル場合ニテモ特別代理人ヲ任セサル可ラス而シテ其手續ニ至
テハ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク外總テ第四十六條ノ規定ニ依準
ス可キモノトス

〔參照〕

獨 第五十五條 訴訟能力ヲ有セサル原被告法律上代人ナ
クシテ出訴セラルヘキトキ其訴訟裁判所ノ裁判長ハ遲延
ノ恐レアル場合ニ限り申立ニ依リ法律上代人ノ出廷スル
マテ特別代人ヲ任スヘキモノトス
裁判長ハ第二十一條ノ場合ニ於テ訴訟能力ヲ有セサル者

其滯在地又ハ屯營地ノ裁判所ニ出訴セラルヘキトキニモ
亦此特別代人ヲ任スルコトヲ得

第二節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ

數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義
務共通ノ地位ニ立ツトキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基
ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律
上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ
訴訟ノ目的物タルトキ

〔解義〕〔理由〕〔的例〕

本條ハ共同訴訟人トシテ數人カ一時ニ訴ヲ爲シ又訴ヲ受ク
ル場合ヲ示定セリ

共同訴訟人ト爲リ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クル場合ハ左ノ
如シ

第一數人カ訴訟物件ニ付共同ノ權利義務アル時ニシテ例ヘ
ハ數人連帶ノ權利者又ハ義務者トナリテ金圓ノ貸借ヲ爲シ
タルトキノ如シ此時ハ其請求又ハ負擔ニ付同一ナル權利義
務ヲ有スルヲ以テ共同訴訟人トシテ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ
受クハキナリ

第二同一ナル事實上及ヒ法律上ノ理由ニ因リ權利者又ハ
義務者ナルトキニシテ例ヘハ連名ノ貸借ニシテ權利者義務

者共ニ其一部宛ノ權利義務ヲ有スルニ止マルトキノ如シ此
時ハ事實上及法律上同一原由ナルヲ以テ共同訴訟人トシテ
共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クヘキナリ

第三訴訟物件性質上同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ理由
ニ基クノ請求又ハ義務ニ係ルトキニシテ例ヘハ保險會社カ
數多ノ被保人ヨリ別個ニシテ而カモ同種類ナル規約券ヲ以
テ其約束ニ相當スル純益配當金ノ支拂ヲ訴ヘラル、トキ及
ヒ數多ノ股分持主各種ノ證券ニ因リ各々或ル率額ノ配當ヲ
受クヘントシテ其配當ノ請求ニ對シ訴訟スルカ如シ此時モ
共同訴訟人トシテ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クヘキナリ
以上共同訴訟人トシテ共ニ訴ヲ爲シ又訴ヲ受クルハ期日
ノ短縮手續ノ節約費用ノ節減ニ付大ナル利益アルモノナリ

本條ヲ設クルノ趣旨モ亦此理由ニ外ナラス
 本條得ノ字ヲ加ヘタルヲ視レハ訴訟人ハ此場合ニ於テモ各
 別ニ訴ヲ爲シ又訴ヲ受クルヲ得ヘキハ明カナリ然レモ本法
 第二百十條ニ依ルルハ裁判所ハ職權ヲ以テ訴訟ノ合併ヲ命
 スルヲ得ヘキナリ又第一百十八條ニ依レハ裁判所ハ合併シタ
 ル訴訟ニテモ便宜上辨論ヲ分離スルコトヲ得ヘキナリ
 本條ニ掲グル以外ノ場合ニ於テハ決シテ共同訴訟人トナル
 可ラス若シ共ニ訴ヲ爲ストキハ裁判所ニ於テ却下スヘキナ
 リ
 又共同訴訟ハ數多ノ原告ナルカ將タ數多ノ被告ナルカノ場
 合ニシテ必ス二人以上ノ人アルヲ要ス故ニ彼ノ一人ニ對シ
 數多ノ請求ヲ合併シテ訴フルモノト混同ス可ラサルナリ

〔參照〕

獨 第五十六條 數人訴訟事件ニ付權利共同者ナルトキ又
 ハ同一ノ事實上及法律上ノ理由ニ依リ權利者又ハ義務者
 ナルトキハ訴訟仲間トナリ共同シテ出訴シ又ハ出訴セラ
 ルコトヲ得

全 第五十七條 同種類及本然同種類ノ事實上及法律上ノ
 理由ニ基ク請求又ハ義務ノ訴訟事件ナルトキニモ亦數人
 訴訟仲間トナリ共同ノ出訴シ又ハ出訴セラルコトヲ得

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ
 相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ
 相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ
 他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ホサス

〔解義〕

本條ハ共同訴訟人ノ法律上ノ地位ニ關スルコトニ付キ示定セリ

抑共同訴訟人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルハ其實狀ニ於テ變體ヲ顯ハスモ法律上ノ効果ニ至テハ各自ニ訴ヲ爲シ又各自ニ訴ヲ受クルト毫モ異ナラサルナリ故ニ共同訴訟人中一人ノ訴訟行爲ハ他ノ共同訴訟人ニ利益ヲ與ヘス又損害ヲ加ヘサルナリ

共同訴訟人ハ各自獨立スヘキヲ以テ他ノ共同訴訟人ト同一ナル辨論ヲ爲スヲ要セス各々其所考ニ任セ攻撃辨護ヲ爲ス下ヲ得ヘキナリ故ニ一般ノ場合ニ於テハ期日ニ出廷シ若クハ欠席スルコトノ結果ヲ一人ニテ擔任セサル可ラス又訴訟

入費ニ至テモ全一ノ結果ヲ見ハスモノトス(本法第八十條)

〔理由〕

本條ハ第三者ノ行爲ハ他人ノ利益ヲ爲サス又損害ヲ爲サスト云ヘル原則ニ基ケルモノトス(民法財産篇第三百四十五條)

〔參照〕

獨 第五十八條 訴訟仲間ハ民法又ハ此法ノ規定ニ於テ別段ノ定メナキ場合ニ限り其一人ノ行爲他人ニ利益ヲ與ヘ及損害ヲ加フルコトナクシテ對手ニ對シ各自獨立スルモノトス

第五十條 然レモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニシテ確定ス可キトキニ限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ効ヲ生ス
 共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス
 共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス
 然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサルシ場合ニ於テ爲ス可キ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲ス丁ヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タ

リトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得
 [解義] [理由]

本條ハ前條ノ例外ニシテ共同訴訟人ノ行爲カ他ノ共同訴訟人ニ効力ヲ及ホス可キ場合ヲ示定セリ

共同訴訟人ノ行爲ニシテ他ノ共同訴訟人ニ効力ヲ及ホスニハ左ノ條件ヲ要ス

訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキ

權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキトハ例ヘハ地所ニ付其共有者ニ對シ請求ヲ爲ス道路ノ通行權或ハ水道疏通權ニ關スル訴訟事件ノ如シ此場合ニ於テ共同訴訟人ノ陳述相異ナル并(例ヘハ其一名ハ承諾シ他一名ハ之ヲ爭論スルキ)ノ如シ裁判所ハ其認定ニ依リ事實ノ證明アリタルヤ否ヲ判斷ス

可キモノトス即チ地役ハ不可分ナルヲ以テ所有者ノ或一部
 ハ地役ヲ免シ或一部ハ義務アリト爲スヲ得サルナリ必ス共
 有者ニ通シテ一齊ノ裁判ヲ與エサル可ラス此他民法上不可
 分ト定ムルモノハ皆ナ此中ニ包含スルモノナリ
 共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦辨護ニシテ他ノ共同
 訴訟人ノ利益^〇トナル可キトキハ其効ヲ及スモノナリ是レ代
 理人ハ本人ノ利益ノミナ計ル可シトノ普通原則ニ基ケルモ
 ノトス
 又共同訴訟人中ノ或人カ對手人ノ主張ヲ争ヒ又ハ認諾セサ
 ル片ハ總テノ共同訴訟人モ亦悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノ
 ト見做ス
 又本條ハ共同訴訟人間其權利義務ニ付判決ノ異同ヲ來シ以

テ匡救ス可ラサルノ混雜ヲ招キカサラシメントテ慮リ共同
 訴訟人中期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者
 ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ委任シタルモノト見做セリ此場合
 ニ於テモ懈怠シタル者ニハ懈怠セサリシ時ト同シク總テノ
 送達呼出ヲ爲サハル可ラス即チ共同シテ起訴セル事件ハ及
 フ的其終局マテ共同シテ進行セシメントノ義ニ出タルモノ
 ナリ故ニ又懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴
 訟手續ニ加ハルヲ得ヘキナリ

〔參照〕

獨 第五十九條 訴訟トナリタル權利上ノ關係訴訟仲間總
 員ニ對シ合一スルニアラサレハ確定スルコトヲ得サル場
 合又ハ訴訟仲間其他ノ理由ニ依リ缺クヘカラサル者ナル

場合ニ於テ各箇ノ訴訟仲間裁判期日又ハ期限ヲ懈怠スル
トキ其懈怠シタル訴訟仲間ハ懈怠セサル者ニ依リ代理セ
ラレタル者ト看做ス

其懈怠シタル訴訟仲間ハ其後ノ裁判手續ニモ亦立會ハシ
メラルヘキモノトス

同 第六十條 訴訟ヲ擔任スルノ權ハ各訴訟仲間ニ屬スル

モノトス訴訟仲間對手ヲ裁判期日ニ喚出ストキハ其他ノ
訴訟仲間ヲモ亦喚出ス可シ

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟
ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲ニ請求スル
第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴

訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙
方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ主張スル
コトヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權
ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同シ

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審
ニ繫屬スルトヲ問ハス原告被告若クハ主參加人
ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付テノ權
利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得
中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬
スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

〔字解〕

權利拘束トハ裁判關係ト云フノ義ナリ即チ原被告ハ提起セラレタル訴訟ニ付受訴裁判所ニ於テ法律上訴訟人タルノ關係ヲ生スルモノナリ而シテ權利拘束ハ民法上訴訟法上種々ノ効果ヲ生ス訴訟ノ提起アリタル片期滿免除ノ期限ヲ中斷スルハ民法上ノ効果ノ一ナリ訴訟法上ノ効果ニ至テハ本法第百九十五條ニ規定セリ

〔解義〕〔的例〕

◆本節ハ主參加補從參加告知參加本人指示參加ノ四個ヲ規定セリ而シテ主參加ニ付テハ第五十一條第五十二條ノ目的タリ

第五十一條

他人ノ間ニ爭訟スル目的物ノ全部又ハ一部ニ付自己ノ權利ヲ主張セント欲スルハ本訴訟即チ他人ノ間ノ爭訟ノ裁判確定ニ至ルマテ何時ニテモ其訴訟ノ第一審裁判所ニ本訴訟ノ原被告ヲ相手取り訴ヲ起スコトヲ得ヘシ之ヲ主參加訴訟ト云フ

例へハ甲者乙者ニ家屋ヲ賣リ後ニ至リ再ヒ之ヲ丙者ニ賣却セリ而シテ先ニ丙者ヨリ其引渡ヲ請求シ甲丙二人ノ間ニ爭訟ヲ起セリ此時乙者ハ甲丙ノ間ニ爭訟セル家屋ニ付先取權アルコトヲ主張シ甲丙二人ヲ相手取り出訴セリ之ヲ主參加ノ場合トス

第一審ニ繫屬シタル裁判所ニ云々トアリ故ニ該爭訟ニシテ

第二審ニ繫屬スル片即チ第一審ノ裁判ヲ終リ第二審へ上訴
 中ト雖モ猶ホ其訴訟ノ繫屬シタリシ第一審裁判所ニ訴へ出
 テサル可ラス此等之等テトアリ權利拘束ハ裁判確定ニ至リ
 權利拘束ノ終ニ至ルマテト解釋スルヲ可ト
 始テ消滅スルヲ以テ裁判確定ニ至ルマテト解釋スルヲ可ト
 ス然レモ争訟中參加ヲ爲サスシテ止ミタル第三者ニシテ眞
 ニ請求スヘキ權利アル片ハ假令本案ノ判決ハ既ニ確定シタ
 リト雖モ其訴訟物件ニ對シテハ依然權利ヲ保有スル原則ニ
 依リ其判決ノ執行セラレントスルニ方テ其權利ヲ主張スル
 コトヲ得ヘシ本法第五百四十九條
 權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物トアリ是ヲ以テ原告カ彼
 告ニ訴狀ヲ送達シタル場合又ハ假差押假處分ノ命令ヲ請求

シ又ハ督促手續ニ依リ命令ヲ送達スル等權利拘束ノ始マリ
 タル場合ナラサル可ラス
 第三者カ原告被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スル
 コトヲ主張スル片モ前ト同シク兩人ヲ相手取り第一審裁判
 所ニ出訴スルコトヲ得可シ第三者カ原告被告ノ共謀ニ因テ損
 害ヲ受クル場合ハ民法財産篇第三百四十條以下ニ規定セリ
 主參加ハ一種ノ裁判管轄ヲ成スモノナリ即チ第三者カ相争
 訟セル原被告ヲ相手取り第一審ノ繫屬セシ裁判所ニ出訴ス
 ルコトヲ得ルハ一ノ新管轄ヲ定ムルモノト云フヘシ是レ其
 審理ヲシテ簡易ナラシムルノ趣旨ニ出ツルモノトス
 第五十二條
 主參加訴訟ヲ起シタル片ハ本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルモ又

上級審ニ繫屬スルモ主參加ニ付テノ裁判確定スルマテ之ヲ中止スルヲ得可シ而シテ裁判所ハ原告若クハ主參加人ノ申立アルル而已ナラス職權ヲ以テモ中止スルヲ得ヘシ

(本法第二百一十一條)

中止ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬セル裁判所ニ爲サハル可ラス其裁判所ハ口頭辨論ヲ須ヒス直ニ會議室ニ於テ申立ノ適否ヲ決定ス可シ又裁判所カ中止ヲ命スル決定ニ對シテハ中止ノ爲メ不利ナル者ヨリ即時抗告ヲ爲スヲ得ヘシ即時抗告ノハ本法第四百六十六條ニ規定セリ

[參照]

獨 第六十一條 何人タリトモ他人ノ間ニ於テ訴訟ノ裁判關係トナリタル物件又ハ權利ノ全部又ハ一部ヲ獨立シテ

請求スル者ハ其訴訟ノ裁決確定スルマテハ始審裁判ニ於テ訴訟ノ裁判關係トナリタル裁判所ニ原告被告雙方ニ對スル訴訟ヲ以テ其請求ヲ申立ルノ權アルモノトス

同 第六十二條 本裁判手續ハ原告一方ノ申立ニ依リ本立入ニ付テノ裁決確定スルマテ之ヲ延期スルコトヲ得

第五十三條

他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟

ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助(從參加)スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

[解義]

本條ハ補助參加ノ事ニ付示定セリ

他人ノ間ニ相争フ訴訟ニ於テ原告一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係アル者ハ其一方ヲ補助スル爲メ之ニ参加スルコトヲ得ヘシ

補助参加ハ主参加ニ反對シテ参加人カ本案ノ原告ノ權利ニ係リ其訴訟物件ニ對スル特有ノ請求ヲ爲スニ非ラスシテ只本案ノ裁判自己ノ權利上ニ利害ヲ及ホスヲ悞ルハニ在ルナリ故ニ本案原告ノ一方ヲ助ケテ以テ勝訴タラシメン爲メ参加スルモノトス
訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間トアリ故ニ訴訟終局マテ何時ニテモ参加スルヲ得ヘシ又
特リ第一審裁判所ノミナラス訴訟カ第二審ニ繫属スル片ト雖モ之ニ参加スルヲ得ヘシ

〔的例〕

其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スルトハ補助参加人ノ自己ノ權利又ハ義務カ其勝敗ニ因テ得喪アルノ義ニシテ一ニ例ヲ擧ケレハ

甲者乙者ヨリ或物件ヲ買得セリ後チ丙者來テ其物件ノ所有權ヲ主張シ一ノ訴訟トナレリ此場合ニ於テ乙者ハ其訴訟ノ勝敗ニ依リ大ニ己ノ利害ニ關係ヲ有スルモノナリ何トナレハ若シ丙者勝訴ヲ得ンカ甲者ニ對シ奪取擔保ノ責ニ任セサル可ラサレハナリ故ニ乙者ハ其訴訟ニ参加シ該物件ハ元來自己ノ所有ナルヲ以テ之ヲ賣渡セシモノニシテ決シテ汝ノ所有ニ非ラサル旨ヲ主張スルヲ得ヘシ
連帶權利者又ハ連帶義務者ノ一人カ訴訟ヲ爲ス并他ノ相權

利者義務者ハ其勝敗ニ依テ大ニ利害ヲ有スルヲ以テ之ニ參加スルコトヲ得ヘシ
債主ハ負債主ト第三者トノ訴訟ニ付大ニ利害ノ關係ヲ有セ
ルヲ以テ場合ニ依リ負債主ヲ補助スルコトヲ得ヘシ(民法財産
篇第三百三十九條)

[參照]

獨 第六十三條 何人タリトモ他人ノ間ニ裁判關係トナリ
タル訴訟ニ於テ原被告一方ノ勝訴トナルコトニ權利上ノ
利益ヲ有スル者ハ其一方ヲ幫助スルカ爲メ之ニ附隨スル
コトヲ得
副立入ハ訴訟中何時タリトモ其訴訟ノ裁決確定スルマテ
上訴ノ呈出ヲ併セ亦之ヲナスコトヲ得

第五十四條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有効ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ存スル期間内ニ故障支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有ス
從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相牴觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

[解義]

本條ハ補助參加人ノ地位ニ付示定セリ
 從參加人ハ畢竟主タル原被告ヲ補助スルニ過キサルヲ以テ
 其訴訟ノ現状ヲ變更セシムル能ハサル勿論ナリト雖原被
 告一方ノ勝訴已ニ利害ヲ及ホスヲ以テ只管之ヲ補助シテ攻
 撃及ヒ防禦ヲ爲シ且原被告ノ爲ニ存スル期間内欠席故障支
 拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス等總テノ訴訟行爲ヲ有
 効ニ行フヲ得ヘキモノトス
 然レモ從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ
 陳述及ヒ行爲ト相互ニ抵觸スルハ主タル原告若クハ被告
 ノ陳述及ヒ行爲ニ依ラサル可ラス何トナレハ從參加人ハ單
 ニ補助スル爲メ附從スルニ過キサレハナリ但民法上從參加
 人ノ陳述及ヒ行爲ヲ重要トセルトノ規定アルハ之ニ從ハ

サル可ラス

〔參照〕

獨 第六十四條 副立入人ハ其附隨ノ時存スル現状ニ於テ
 訴訟ヲ承諾スヘキモノトス副立入人ハ其陳述及ヒ行爲本
 原被告ノ陳述及ヒ行爲ト抵觸セサル場合ニ限り攻撃方及
 辨護方ヲ申立及有効ニ總テ訴訟上ノ行爲ヲナスノ權ヲ有
 ス

第五十五條 從參加人ハ訴訟ヨリ脱退シタルトキ
 ト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ
 於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スル
 コトヲ得ス
 從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ

主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラルトキ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラサリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セサリシトキニ限り其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルコトヲ得

〔解義〕

本條ハ補助參加人ト本案原被告トノ關係ニ付示定セリ從參加人ハ一度其訴訟ニ參加シタル片ハ後チ其參加ヲ止メタル片ト雖モ補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ付テ左ノ効果ヲ生スルモノトス

其訴訟ニ對シ言渡サレタル確定裁判ヲ相當ナリトシテ之ヲ遵奉セサル可ラス

本案原被告カ不十分ノ訴訟ヲ爲シタルトノ抗辯ヲ失フ

故ニ己ノ補助シタル原告若クハ被告ニシテ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル片ハ原告若クハ被告ヨリ求メラル、補償ニ應セサル可ラス例ヘハ己ヨリ原告若クハ被告ニ一ノ物件ヲ賣渡シ後チ眞所有者來テ其物件ヲ請求シ遂ニ原告若クハ被告ノ敗訴ニ歸シタル片ハ之ニ對シ擔保ノ責ニ任セサル可ラス而シテ此等ノ効力何ノ時期ニ又如何ナル程度ニ於テ生スルカハ民法ノ規定スル所ナリ

然レモ從參加人ハ參加ノ時ノ訴訟ノ現狀又ハ本案原被告ノ陳述行爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ妨ケラレ(例ヘハ主

ル原告カ從參加人ノ爲シタル上訴ヲ拋棄スル類又ハ自ラ知了セザリシ攻撃辯護ノ方法ヲ原告カ故意又ハ過失ニ因リ施用セザリシハ其原告若クハ被告ノ爲シタル訴訟ヲ不十分ナリト主張スルコトヲ得ヘシ若シ原告若クハ被告ノ爲シタル訴訟ヲ不十分ナリト主張シ得ヘキハ前ニ掲クル所ト反對ノ効果ヲ生スルモノニシテ其詳細ハ民法ニ於テ研究セサル可ラス

理由 被告の攻撃辯護は、原告の故意又は過失に因りてなされしものと認めらるる。

〔参照〕

獨 第六十五條 副立入人ハ本原被告トノ關係ニ於テ裁判官ニ呈出シタル訴訟ヲ不當ニ裁決シタリトスルノ申立ニ付キ尋問セラレサルモノトス副立入人ハ其附隨ノ時ニ於ケル訴訟ノ現狀又ハ本原被告ノ陳述及ヒ行爲ニ依リ攻撃

方又ハ辨護方ヲ申立ツルコトヲ妨害セラレタル場合又ハ其知了セザリシ攻撃方又ハ辨護方ヲ本原被告故意ヲ以テ又ハ大過失ニ依リ申立テサル場合ニ限り本原被告訴訟ヲ不充分ニナシタリトスルノ申立ニ付キ尋問セラレ、モノトス

第五十六條 從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ

申請ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ
申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ
從參加ハ故障異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕

本條ハ參加ノ方法ニ付示定セリ
 從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ申
 請セサル可ラス
 本訴訟ノ繫屬スル裁判所トアリ故ニ第一審裁判所ナラサル
 モ當時上級裁判所へ上訴セルルハ該上級裁判所ニ申請ヲ爲
 スコトヲ得ヘシ
 申請ニハ原被告ノ氏名及ヒ訴訟事件ヲ表示シ又一定ノ利害
 關係アルコ及ヒ附隨セント欲スル旨ヲ開示セサル可ラス
 申請ハ當事者即チ原被告ニ送達シテ參加セント欲スル旨ヲ
 知ラシムルヲ要ス
 又從參加ハ缺席裁判ニ對スル故障、支拂命令ニ對スル異議又

ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ

〔參照〕

獨第六十七條 副立入人ノ附隨ハ書面ヲ送達シテ之ヲナ
 スモノトス其書面ニハ左ノ件々ヲ記載スヘシ

- 第一 原被告及訴訟
- 第二 副立入人ノ有スル一定ノ利益
- 第三 附隨ノ旨

其他準備書面ニ關スル普通ノ規定ヲ適用スルモノトス

第五十七條 原告若クハ被告カ從參加ニ付異議ヲ
 述フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊シタル
 後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭
 辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

利害關係ノ存否ニ付キ争アルトキハ從參加人其關係ヲ疏明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

〔解義〕〔理由〕

本條ハ補助參加ヲ允許シ又ハ却下スル事ニ付示定セリ原告若クハ被告カ從參加ニ付異議ヲ述ブルキハ裁判所ハ原告及ヒ從參加人ヲ審問シ參加ノ適否ヲ取調タル後之カ裁判ヲ爲ス然レモ訴訟外ノ手續ナルヲ以テ口頭辨論ヲ須ヒス

直ニ會議室ニ於テ決定スルコトヲ得ヘシ單ニ利害關係ノ存否ニ付争アル片ハ從參加人ハ其關係ヲ證明スル而已ヲ以テ參加ヲ許サル可シ何トナレハ利害ノ關係ノ存否ノミヲ争ヘルヲ以テ其關係サキ分明ナレハ最早參加ニ付異議ナキモノト見做スレハナリ而シテ參加許否ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ參加ヲ許サル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ訴訟ニ立會ハシメ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ之ヲ送達セサル可ラス何トナレハ若シ之ヲ立會ハシメサル片ハ參加許否ノ裁判確定スルマテ本訴訟ヲ中止セサル可ラサレハナリ

〔參照〕

獨 第六十八條 副立入ノ却下ヲ求ル申立ニ付テハ豫メ原
被告及副立入人ノ口頭上審問ヲナシタル後之ヲ裁決スル
モノトス副立入人ハ其利益ヲ證明スルトキ其立入ヲ許サ
ルヘシ

中間判決ニ對シテハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得
立入人ハ立入ヲ許サレサルノ言渡確定セサル間本裁判手
續ニ立會ハシメラル、モノトス

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ
其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任
スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告
ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ
被告ヲ脱退セシム可シ

〔解義〕〔理由〕

本條ハ補助參加人カ訴訟ヲ擔任スル場合ヲ示定セリ
從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得ル并ハ其附隨セル原告若
クハ被告ニ代リ其訴訟ヲ擔任スルコトヲ得ヘシ此時ハ初ヨ
リ參加人ト對手人ト訴訟セルモノト見做サレ附隨シタル原
告若クハ被告ハ全ク其訴訟ノ關係ヲ脱スルモノトス然レモ
若シ參加人敗訴トナリ而シテ訴訟物件附隨シタル原被告ニ
存在スル并ハ勝訴者タル原被告ヨリ其執行請求ヲ受クルヲ
免レス又附隨セラレタル原被告ハ場合ニ依リ參加人ニ訴訟
ヲ讓ルコトアリ個ハ民法ニ於テ研究スヘキコトナリ
當事者雙方ノ承諾ヲ得テトアリ故ニ特リ附隨シタル原被告
ノ承諾ヲ得ル而已ナラス相手人ノ承諾ヲモ得サル可ラス何

トナレハ参加人ハ無資力ニシテ其對手人カ勝訴トナルモ
完全ノ辨償ヲ受ケル能ハサルコトアレハナリ
從参加人カ雙方ノ承諾ヲ得テ訴訟ヲ擔任セルモハ裁判所ハ
原告若クハ被告ノ申立アルモ其訴訟ヨリ原告若クハ被告ヲ
脱退セシム可キ判決ヲ爲サ、ル可ラス

第五十九條

原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ
第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシ
ト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キコトヲ恐
ルル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴
訟ヲ告知スルコトヲ得
訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スル
コトヲ得

〔解義〕

本條ハ各原被告若シ其訴訟ノ敗訴者タル場合ニ於テ先權者
ニ向テ反求ヲ爲サント思料シ又ハ不完全ナル訴訟ヲ爲シタ
リトテ請求ヲ受ケルヲ恐ル、時ハ訴訟告知ヲ爲シ得ハキ規
則ヲ示定セルモノナリ
抑本條訴訟告知ト從参加トハ酷ク相類似スルモノニシテ即
裁判ノ勝敗ハ原被告ト第三者トノ間ニ存スル權利上關係ニ
影響ヲ及ホシ得ハキ場合ニ於テ爲スモノトス而シテ其相異ナ
ル所ハ即チ從参加ハ本人ヲ補助シテ勝争者ヲラシメシカ爲
メ任意ニ其訴訟ニ參加シ之ニ反シ訴訟告知ハ原被告一方ノ
本人ノ意思ニ出テ第三者ヲ要シテ其訴訟ニ參加セシメ其援助
ニ因テ以テ勝訴者タルカ若クハ敗訴シタル場合ニ於テ自己

ト第三者トノ間ニ於テ他日彼ノ訴訟ハ不十分ニ爲シタリ或ハ不當ノ裁判ナリトノ苦情ヲ免レンコトヲ豫防スルニ在ルナリ
 而シテ原被告ハ如何ナル場合ニ於テ訴訟告知ヲ爲スヘキ責任アルカ又其場合ニ於テ之ヲ爲サハリシ時ハ如何ナル成績ヲ顯ハスカニ付テハ民法ノ規定スル所ニシテ只本法ニ於テハ訴訟告知ノ訴訟上ニ允スヘキト及ヒ其程式効用ニ付テノミ定ムルモノナリ
 訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得トアリ故ニ初審以上ノ上級裁判所ニ於テモ即チ訴訟ノ上級裁判所ニ繫屬スル時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ
 訴訟ヲ告知スルニハ必ス一ノ訴訟現在セサル可ラス蓋シ起

訴スルト共ニ訴訟告知ヲ爲シ得ヘキモ將ニ起ラントスル訴訟ニハ未タ之ヲ爲スヲ得サルナリ又訴訟ノ結局即裁判ノ確定ト共ニ訴訟告知ヲ爲スヘキ時期消滅ス而シテ原被告本法第五百四十九條ノ場合ニ方リ第三者ニ勸告シテ強制執行手續中ニ共參シテ權利ヲ主張セシムルコトハ固ヨリ爲シ得ヘシ
 雖モ到底訴訟告知ノ効用ヲ有セサルナリ
 告知スルコトヲ得トアリ故ニ之ヲ告知スルト否トハ原被告ノ隨意ナリ然レモ敗訴シタル場合ニ於テ之ヲ告知シタルト否ニ依リ大ニ利害ニ關係アル可シ即チ先權者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求權ヲ失ヒ又第三者ヨリ請求ヲ受クルヲ免レサルコトアル可シ本法第六十二條第六百十條ニハ必ス告知ヲ爲スヘキ場合ヲ示定セリ之レハ已チ得サルノ告知ト名クヘキ

モノナリ

第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得可キ場合并ニ第
三者ヨリ請求ヲ受ク可キ場合ハ須ラク民法ニ於テ研究セサ
ル可ラス

本條第二項ハ訴訟ノ告知ヲ受ケタル者更ニ訴訟ノ告知ヲ爲
シ得ヘキヲ示定セリ即チ被告知人ハ又己ノ先權者ニ對シ
テ訴訟ノ起リシヲ告知シ後日其先權者ニ對シテ擔保又ハ
賠償ヲ請求スルノ道ヲ開キ先權者ヨリ請求ヲ受クルノ豫
防ヲ爲シ得ヘキナリ

〔參照〕

獨 第六十九條 訴訟ノ結果自己ニ不利ナル場合ノ爲メ他
人ニ對シ保證又ハ損害賠償ノ請求ヲナスヲ得ヘシト信シ

又ハ他人ノ請求ヲ受ルノ恐レアル原被告ノ一方ハ訴訟ノ
裁決確定スルマテ他人ニ對シ裁判上訴訟ヲ通知スルコト
ヲ得

他人ハ更ニ訴訟通知ヲナスノ權アルモノトス

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其
訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書
面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ
此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ
告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其謄本ヲ
送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ラス之ヲ續行ス
第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加